

Tokai University Student Achievement Center Activity Report

2021



東海大学チューデントアチーブメントセンター

※2021年度よりチャレンジセンターから名称変更しました。

〒259-1292 神奈川県平塚市北金目 4-1-1

TEL : 0463-50-2504 (直)

MAIL : project-kakari@tsc.u-tokai.ac.jp

URL : <http://www.u-tokai.ac.jp/challenge/>



東海大学チューデントアチーブメントセンター

活動報告書

2021年度

スチューデントアチーブメントセンターの取り組み	3
チャレンジプロジェクト活動報告	4
【湘南キャンパス】	
病院ボランティアプロジェクト	4
スポーツ社会貢献プロジェクト	5
サイエンスコミュニケーター	6
キャンパスストリートプロジェクト	7
Tokai Formula Club	8
ライトパワープロジェクト	9
東海大学学生ロケットプロジェクト	10
Tokai International Communication Club	11
3.11生活復興支援プロジェクト	12
Beijo Me Liga	13
Tokai Dream Space Team	14
Sunflower	15
【高輪キャンパス】	
Takanawa共育プロジェクト	16
【熊本キャンパス】	
先端技術コミュニティACOT	17
阿蘇援農コミュニティプロジェクト	18
阿蘇は箱舟プロジェクト	19
あにまるれすきゅープロジェクト	20
【札幌キャンパス】	
札幌ボランティアプロジェクト	21
ユニークプロジェクト/メディア掲載/センター長賞受賞者	22
1年間の活動記録	23

スチューデントアチーブメントセンターは
社会が求める4つの力を育む成長の場です。

自ら考える力 集い力 挑み力 成し遂げ力

対象を見据え、その本質を掘り下げ
可能性を広げる力

多様な人々の中で生き、
その集団の形成、維持に寄与する力

困難な問題に主体的に向き合い、
解決・達成に向け踏み出す力

目標達成の途中で生じる失敗や
挫折を乗り越えて、目標に近づく力

社会的実践力を身につけ、
高い専門性で社会に貢献できる人材

チャレンジプロジェクト活動報告

病院ボランティアプロジェクト

湘南

達成目標

社会のニーズに合わせた新しい活動(企画)に挑戦する

学びのテーマ

社会との共生する力を身に付ける

リーダー

サブリーダー

広報リーダー

会計

アドバイザー

コーディネーター

森岡 成

尾崎 将

恵田航斐

高橋悠河

池村明生

大塚耕祐

文化社会学部心理・社会学科

工学部医用生体工学学科

政治経済学部政治学科

工学部電気電子工学科

教養学部芸術学科デザイン学課程教授

教職資格センター

3年

4年

3年

4年

(参加人数 24名)



湘南

スポーツ社会貢献プロジェクト

達成目標

コロナ禍でもスポーツの楽しさ体を動かす良さを広げ地域のQOL向上に貢献する

学びのテーマ

今までとは違うイベントを実施していくと予想されるため一人一人が自ら考える力を学ぶ

リーダー

山下深桜

理学部情報数理学科

3年

サブリーダー

浅見圭祐

体育学部スポーツ・レジャーマネジメント学科

3年

広報リーダー

五十嵐世香

体育学部スポーツ・レジャーマネジメント学科

3年

会計

白井美紀

体育学部スポーツ・レジャーマネジメント学科

3年

アドバイザー

菅沼瑞希

教養学部人間環境学科

3年

コーディネーター

萩裕美子

体育学部スポーツ・レジャーマネジメント学科

遠藤潤治

ウェルネスカレッジオフィス

中野宏美

ウェルネスカレッジオフィス

(参加人数 68名)

活動概要

当プロジェクトはスポーツによってQOLの定義する心身の健康、良好な人間関係2点の向上を特に目的とし、イベントの企画、運営をしている。しかし、コロナの影響により対面の活動が前年度に引き続き制限される可能性がある。その中でもスポーツで社会や人に貢献し、多くの方々にスポーツの楽しさを広め、どのようにしたらQOL向上の手伝いができるか考えていく。また対面での活動に拘らずオンラインや、スポ社だより、SNSといったものを使用し情報発信をしていく。



ミーティングの様子

プロジェクトとしてコロナ禍にどのように向き合って活動したか

今年度は大きく分けて3種類の活動に取り組んだ。1つ目はオンラインイベントだ。5月に「ニコニコ教室」という親子遊びのイベントを行った。約1年半ぶりのイベント実施であり、またオンラインイベントが初の試みだったためうまくいかなかった部分もあったが、今後オンラインイベントを行うにあたってかなり有益な情報を得ることができた。特にルール説明や音響の課題が大きくあげられているため、今後の開催に向けて改善していきたい。

2つ目は対面活動だ。昨年度は対面での活動を一切実施できなかった。しかし、今年度は人数制限や、換気、極力同じものを使用しないなど工夫を凝らし、計6回の対面イベントを実施した。10月には「遊びの広場」を3か所で開催し、子どもに人気のある新聞じりじりや子どもの家全体を使って行うオセロゲームで体を動かした。約1年半ぶりのイベントで初めて参加するメンバーも多かったため、早くから準備やリハーサルに取り組むとともに、各イベントの反省点を共有することにより徐々に改善がなされ、成功したと思われる。11月には「ノルディックウォーキング教室」を行い、高齢者の方々とポールを使用して平塚市内を歩いた。ここでは大学生と高齢者という普段接する機会の少ない両者がお話でき、よい経験となった。また、休憩スポットではレクリエーションを用意し、歩いているときに話すことができなかった方もコミュニケーションを取ることができた。12月には「多世代交流会」と「スポ社運動会」を行った。多世代交流会は、クリスマスツリーに飾り付けやパラバルーンを行った。その一方で、多世代といながらも高齢者の参加者がいなかったため、今後に向けてより参加しやすい種目や宣伝方法を考える必要があるという課題も見つかった。スポ社運動会では、大きなイベントを全く行えていなかったことから、大きなイベントの企画・運営を1、2年生のみで試みた。3年生がいなかったことにより、自分たちでーから考えることの難しさや面白さに気づけたように思われる。参加者をプロジェクトメンバーに限定したため、各学年のメンバーとより仲を深めることのできたイベントだった。

3つ目は「1か月チャレンジ」である。1か月間、体に関する運動などを担当メンバーが体当たりで行っていき、SNSを通じて成果を発表した。また、現在は散歩コースを地方自治体や施設へ提供する企画も進めている。

私達のプロジェクトで行ってきた活動を4つの視点から振り返ってみると、自ら考える力と挑み力の部分において特に成長が感じられた。週に一度行うミーティングでは、コロナ禍という活動が制限される状況であっても、自主的に地域の人々のために出来ることを考え実行に移そうと、話し合いを深めることができた。また、毎月公開されるスポ社だよりは、読んでくれる方々や季節に合わせて、運動や健康についての様々な情報を発信することができた。情報を収集し発信していくことが、自分達の知識を増やすことにもつながり、スポーツをより身近に感じられるようになったと考えられる。



ノルディックウォーキング教室



多世代交流会

湘南

サイエンスコミュニケーター

達成目標

理科離れを防ぎ、科学の楽しさを通して人と人とのつながりをつくる

学びのテーマ

積極的な情報共有を行い、チーム間の連携を図ることで臨機応変なイベント実施の方法を学ぶ

リーダー

除村典子

工学部応用化学科

2年

サブリーダー

山崎裕斗

工学部応用化学科

2年

広報リーダー

松永一真

工学部生命化学科

2年

会計

野元 涼

理学部化学科

1年

アドバイザー

岡田 工

スチューデントアチーブメントセンター

コーディネーター

齊藤祐子

サイエンステクノロジーカレッジオフィス

(参加人数 32名)

活動概要

サイエンスコミュニケーターは「理科離れ」という社会問題を解決することを目指して活動する。主に小中学生を対象に会場参加型の企画として科学館や公民館、学校、商業施設などで実験ショーや工作実験を実施する。また、コロナ禍の状況では、オンラインツールやSNSを活用することで、オンライン形式での科学イベントを実施する。これらの科学イベントを通して人と科学、人と人とのつながりをつくることを目指す。



人工いぐらの実験教室

プロジェクトとしてコロナ禍にどのように向き合って活動したか

私たちサイエンスコミュニケーターの2021年度の活動目標は「理科離れを防ぎ、科学の楽しさを通して人と人とのつながりをつくる」である。今年度の活動はコロナ禍の影響で活動できなかった昨年度と比較して多くの対面形式のイベントおよびオンライン形式のイベントを実施することが出来た。秦野市大根公民館や平塚市子ども大学ひらつか奏アカデミーでは対面でのイベントを行い、サイエンスリンクや平塚市中央公民館のイベント、また建学祭において実験ショーや工作動画をYouTubeを用いて配信した。解説方法や注釈を工夫し、視聴者に伝わり易い動画を意識し、作製した。参加者に行ったアンケート結果から「自分のペースで見られた。」や「面白かった。」等の好意的な感想を頂いた。このことからYouTube等の動画配信サイトを活用した活動の可能性を感じた。今年度の活動において新型コロナウイルス感染症拡大防止の観点から、対面形式のイベントの中止や参加を見合わせたイベントが多かった。毎回、臨機応変な対応が求められ、プロジェクト活動を計画通りに行うことの難しさを学んだ。今後、対面のイベントだけではなく、YouTube等の動画配信サイトを活用したプロジェクト活動を計画していきたい。

対面形式のイベントにおいて新型コロナウイルス感染症拡大防止対策のため、参加者にその場で実験を直接体験し、参加してもらう形式のショーが難しくなった。一方、オンライン形式でのイベントでは実験を観て興味を持ってもらうこと、触れずに楽しんでもらうことの難しさと直面した。参加者に対して実験に関するクイズを出題することで参加者の実験への参加を促し、関心を高めてもらうための工夫を行ったが、参加者の反応が薄く難しさを実感した。今後は、参加者と一体となって楽しめるように改善していきたい。

今年度は新メンバーの勧誘活動に難航した。説明会を複数回開催したが、結果として新メンバーを多く獲得することが出来なかった。現在のメンバーに対してSNSを使用した新メンバー勧誘に関する案を募ったが、あまり積極的な意見が出なかった。今後の活動において、メンバー同士で意見を交わしやすい信頼関係の構築が必要であると考えた。

今年度の活動から科学イベントを多様な形式で継続的に実施することにより、多くの人と科学のつながりを作るきっかけになるということが分かった。また、オンライン形式でのイベントを実施することで湘南キャンパスから離れた場所に住む人と科学のつながり及び人と人とのつながりも作りやすくなることを実感した。今年度の活動での学びを来年度の活動に生かし、「理科離れ」という社会問題の解決のために私達サイエンスコミュニケーターが貢献できることを考え、活動していきたい。今年度のような社会情勢が続くことが予想されるため、オンライン形式のイベントを積極的に実施していくための様式を確立させていきたいと考えている。



空気の実験ショー



偏光板を用いた工作実験

キャンパスストリートプロジェクト

湘 南

達成目標 地域の魅力を発信し、地域と学生の架け橋となるための新たな挑戦をする

学びのテーマ 積極的に地域と向き合うことで、交渉力や立案力、発信力を養う

リーダー	坂西竜之介	工学部電気電子工学科	3年
サブリーダー	大塚奈央	工学部電気電子工学科	3年
	川東綾香	教養学部人間環境学科社会環境課程	4年
広報リーダー	宮崎正弘	工学部電気電子工学科	3年
会計	林 直樹	法学部法律学科	3年
アドバイザー	池谷美衣子	チューデントアチーブメントセンター	
コーディネーター	山砥慶成	リベラルエデュケーションカレッジオフィス	
	岩崎ゆかり	リベラルエデュケーションカレッジオフィス	
(参加人数 27名)			

活動概要

2021年度の私達の活動は、学生と地域の架け橋となることを最終目標とし、地域との交流を深めるイベントの主催や、地域の課題を解決するためのボランティア活動を行っている。イベントの面では、前年度の活動の反省から、コロナ禍での地域と学生が交流を深めるきっかけとなる場を提供していく。ボランティア活動の面では、地域の既存の活動に参加し、地域の課題の解決に向けて協力していく。



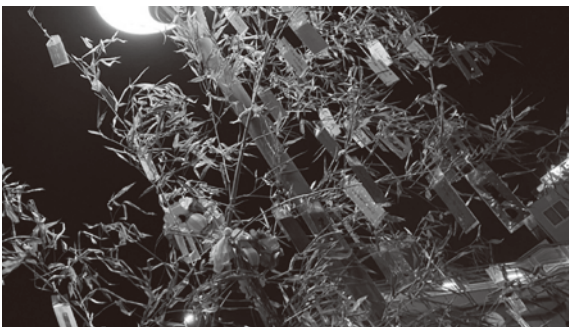
▶ スターフェスティバル2021準備の様子①

プロジェクトとしてコロナ禍にどのように向き合って活動したか

私達キャンパスストリートプロジェクトは、「地域貢献」「地域活性」で地域の魅力を学生に伝え、地域と学生の架け橋になることを目指して活動しているプロジェクトである。「この街一緒に盛り上げない？」を合言葉に地域の交流に参加し、学生と地域住民の楽しめるイベントの主催や、地域の魅力を発信し、学生に向けて発信を行っている。今年度は、新型コロナウイルス感染症の影響により例年実施していたイベントが一部開催できなくなってしまったため、新企画として「スターフェスティバル2021」、「TOKAI HALLOWEEN TOWN 2021」の2つのイベントを開催した。またオンライン企画として「C.A.P.的マナー講習会」、「プロジェクト間交流会」(全2回)を実施したほか、毎年開催している企画として「クリスマスU-night2021」を実施した。「スターフェスティバル2021」では東海大学前駅にて笹や短冊を展示し七夕の季節を演出した。またオンラインでの企画としてSNSを利用した短冊の願い事集めや動画の作成を行った。「TOKAI HALLOWEEN TOWN 2021」では駅前広場にハロウィンを演出し、フォトブース設置とワークショップ、駅前周辺地域でのスタンブラリーを実施した。また、大根幼稚園、秦野精華園、ひろはたこども園にオーナメントの作成に協力していただき、作品を陸橋にて展示した。「C.A.P.的マナー講習会」ではコーディネーターとアドバイザーの協力のもと、本プロジェクトメンバー向けにメール、電話、対面交渉時の基本的なマナーを学ぶと同時に、今年度からの新入生とコーディネーターの顔合わせの機会とした。「プロジェクト間交流会」では他プロジェクトとの活動内容の共有や交流を目的として、第1回では病院ボランティアプロジェクトと本プロジェクトのメンバー、第2回では第1回の参加者に3.11生活復興支援プロジェクトとSunflowerのメンバーを加えて実施された。「クリスマスU-night2021」では例年開催していた点灯式やワークショップを今年度は実施せず、クリスマスツリー設営とイルミネーション装飾を行った。また、大根幼稚園、秦野精華園、さなだ幼稚園にクリスマスのイラスト作成に協力していただき、作品を駅前広場にて展示した。今年度は、前年度と比較して新型コロナウイルス感染症の蔓延がある程度落ち着いたことから、対面でのイベントの開催を重視して活動を行った。東海大学前駅駅前広場に複数回のイベントを開催したことで、駅前商店会をはじめとした地域の方々との継続的なつながりを再開することができた。実施したイベントの反省から、今年度実施した企画は検討や準備のための期間が例年と比較して短く、また会議や活動に参加するメンバーが例年と比較して少なかったことから、活動に参加したメンバーの負担が大きくなってしまった。このことから、次年度は引き続き対面でのイベントは積極的に行っていくが、イベントでの企画数や内容などを精選し、活動がメンバーの負担にならないような改善を図りたい。



▶ スターフェスティバル2021 準備の様子②



▶ スターフェスティバル2021

Tokai Formula Club

湘 南

達成目標 第19回全日本学生フォーミュラ大会出場

学びのテーマ 学生フォーミュラの車両製作を通して、次世代のものづくりを担う技術者としての技術と責任感を学ぶ

リーダー	佐々木拓未	工学部動力機械工学科	2年
サブリーダー	矢野直樹	工学部動力機械工学科	2年
	前田剛志	工学部機械工学科	3年
広報リーダー	益谷祐貴	工学部動力機械工学科	2年
会計	茂木健斗	工学部動力機械工学科	2年
アドバイザー	加藤英晃	工学部動力機械工学科	
	成田正敬	工学部動力機械工学科	
	吉永昌史	工学部動力機械工学科	
	高橋 俊	工学部動力機械工学科	
	森下達哉	工学部動力機械工学科	
	森山裕幸	工学部動力機械工学科	
コーディネーター	関根啓由	エンジニアリングカレッジオフィス	
(参加人数 47名)			

活動概要

Tokai Formula Clubは学生フォーミュラ日本大会の出場を目指し、小型のフォーミュラカーの設計から製作、走行とチーム運営を学生の手で行うプロジェクトである。日本国内では珍しいフルカーボンモノコックを採用し、18年度大会総合8位、19年度大会総合7位(全98チーム中)と好成績をおさめている。今後更なる好成績を目指し1〜4年生が丸となって日々の活動を行っている。



▶ フォーミュラカーのスラローム走行

プロジェクトとしてコロナ禍にどのように向き合って活動したか

Tokai Formula Club の21年度プロジェクト活動においては、コロナウイルスによる活動制限のなかで4つの視点からの学びそれぞれにつながる活動を送ることができたとともに、反省点も多く今後につながる1年間となった。まず挑み力については、車両製作を含む日々の活動の中で成長することができた。新型コロナウイルスによる活動制限の影響で車両の製作や運営面において引き継ぎを行うことができなかった。これまで積み上げてきたものが無に帰してしまうところであったが、活動再開後の製作では3年生を中心として経験のある4年生や新たに活動に参加することになった2年生も加わることでチームの活動を続けることができた。次に集い力については、活動再開後の活動と新チームの会議の質の向上が挙げられる。1年間にわたる活動制限の影響により、チーム内ではモチベーションに差が生じ、活動が再開したもののメンバー全員で活動を再開することはできなかった。しかし、残ったメンバーは目標や引き継ぎなど活動再開後にそれぞれの活動を全力で行うことができた。また、1月より22年度大会に向けたチームが本格的に始動したなかで、それまでオンライン活動が中心であったため対面での活動にメンバーを集めることに苦労したもの、チームの全体会議及び幹部陣の会議を対面で行うことで対面によるコミュニケーション量を増やし集い力を向上させることができた。自ら考える力が今年度の活動の中で最も発揮された瞬間は、5月の大会出場辞退の時であると考え。活動制限に伴う製作の進捗の遅れは大きく、車両の製作はもちろん、大会に出場する上で必要な資料の作成も困難を極めていたことに加えて、来年度以降の活動に影響が出ることを考慮した結果、チームは5月に大会出場辞退を決定した。元々大会出場を目的として活動していたためこの決断を下すのは決して容易なことではなかったが、チームの現状をしっかりと客観視した上で辞退を決定したこと、そしてただ単に辞退をしただけではなく次年度に繋げられるようチームの目標を大会出場から車両完成として活動を続けたことは自チームの自ら考える力が最も発揮された瞬間であったと言える。集い力、挑み力、自ら考える力において1年間の活動で成長を続けることができたが、成し遂げ力はプロジェクトとして今後最も成長させていかなければならない力であると考え。今年度の活動ではチーム内で車両周りの解析を担当するVehicle Dynamics班の設立や、1年生の講座や交流会の企画と運営を行うeducational Leaderの設立を成し遂げることができたが、大会出場と車両の完成を成し遂げることはできなかった。20年度と21年度の大会がコロナウイルス感染拡大の影響で中止となったことで、22年度では活動するメンバーのほとんどが出場経験のない中で活動を行っていくことになる。加えてコロナウイルス等まだまだ先行きの見えない状況ではあるが、プロジェクトとして成し遂げ力を向上させていくことや、日頃からご支援を頂いているスポンサー様に2年越しとなる吉報を届けられるよう、なんとしても大会出場を成し遂げる必要がある。そのためには日々の活動をより充実なものとし、メンバー一同が4つの力それぞれを更に成長していけるよう活動を続けていく。



▶ ものづくり館でのチームミーティング



▶ 学生フォーミュラ大会

ライトパワープロジェクト

湘南

達成目標

当プロジェクトは、ソーラーカー・電気自動車・人力飛行機を設計・製作することでものづくりについて学び、ソーラーカーの国際大会、鳥人間コンテストがなくなった今、次の大会に向けた技術の向上を図っていきます
また、コロナ禍でもオンラインなどを用いて大学近隣の地域社会にもものづくりの楽しさや環境を守るエネルギーのすばらしさを伝える活動を企画し、実施します
この活動の他に、学内外で車体・機体の展示活動を積極的に行うことで社会に貢献する活動を展開します

学びのテーマ

メンバー1人1人が相手を認め、協力する大切さを学ぶ

リーダー

サブリーダー

広報リーダー

会計

アドバイザー

コーディネーター

工藤勇人

鈴木遼太郎

山田拓史

黒澤玲音

増田瑞樹

木村英樹

佐川耕平

福田敏大

池田知行

村井健太郎

平島滋義

吉元貴士

工学部電気電子工学科

工学部動力機械工学科

工学部機械工学科

工学部精密工学科

工学部航空宇宙学科航空宇宙学専攻

工学部電気電子工学科

工学部電気電子工学科

工学部航空宇宙学科航空宇宙学専攻

工学部航空宇宙学科航空宇宙学専攻

ヒューマンソサエティカレッジオフィス

スチューデントアチーブメントセンター

エンジニアリングカレッジオフィス

3年

3年

2年

3年

2年

(参加人数 112名)

活動概要

人力飛行機、ソーラーカー、電気自動車の開発・運用を通じて「エコなパワーを使ってものづくりを行い、その技術を社会に伝えていく」活動を行う。
それぞれの開発において、より高度なものづくりをしていくことでソーラーカーの国際大会や鳥人間コンテストに出場し、好成績を残すことを目標に活動を行う。技術を社会に伝えていく活動では、地域の人たちに向けて実際に自分たちが製作している技術を使い、よく飛ぶ紙飛行機などを一緒に作りその技術を直接伝える活動を行う。



▶ ソーラーカーチーム

プロジェクトとしてコロナ禍にどのように向き合って活動したか

今年度のライトパワープロジェクトは組織全体として、「基礎技術力の向上」と「組織体制の変革」を行った。まず組織の「基礎技術力の向上」については、ソーラーカー、電気自動車、人力飛行機に共通する技術の向上を、1、2年生を中心に図っていくことで、組織全体の技術力を向上した。また、例年行っている活動だけでなく1、2年生の基礎技術力を発揮することができる他団体のものづくりイベントに参加し、アウトプットする機会を設ける事で得た知識の再確認・再認識を行い、更なる技術力向上を図った。さらに、ものづくりを行っている人たちと交流する機会を得る事で、ものづくりの視野を拡大することができた。
次に「組織体制の変革」については、組織全体の体制を見直し、チームの統合化でなくそのチームの活動目的に沿った組織体制を新たに構築、展開した。組織全体の目的は「エコなパワーを使ってものづくりを行い、その技術を社会に伝えていく」というものであったが、各チームの技術力が向上するにつれて、より専門性が要求される組織となった。そのため組織の目的よりも各チームそれぞれの目的を達成するための活動体制が構築されていった。これにより組織全体の方向性が分散し、問題が度重なり発生していた。組織体制変革後は、より専門性を活かした活動ができる体制となり、その技術力やチーム力を大幅に向上できると思われる。またプロジェクト間で共通の技術を用いて大きなものづくりをする活動も予定している。



▶ 人力飛行機チーム

今年度の人力飛行機チームでは、技術面と人材面において基礎固めを行った。技術面においては、新型コロナウイルス感染症の影響により活動体制が不十分であったため、新技術の開発が難しい状況にあった。そこで、今年度は新技術の開発ではなく、既存の技術を確立することに注力した。このために実施したCFRPパイプ破壊試験では、機体の重要部分である骨組み部分に、壊れるまで荷重をかけることで安全性を確認した。加えて、機体内の通気性向上や操縦性能を安定させるプログラムの構築などコックピット周りの仕様変更を行いパイロットの快適性を向上させた。これらの活動により、既存の技術の再認識と確立を実現した。

次に人材面において、下級生メンバーの育成に注力した。従来は教育不足により技術の継承やイベントの運営等に課題があった。今年度はマニュアル整備と教育体制を整え、下級生への技術力と主体性の向上を図る活動を行うことで改善を図った。組立試験では上級生が下級生に向け、機体組み立てのノウハウなどを説明し、下級生が主体となり組み立てを行った。これにより2022年春から本格的にスタートするテストフライトの実行や鳥人間コンテストでのスムーズな動作を行うことができると思われる。また各部品の製作班ごとに勉強会を行い、技術の継承をより確かなものにした。これらの基礎固めの他にも新たな活動にも挑戦した。これまで対面で実施してきたものづくり教室をオンライン企画として実施することで、地域社会との交流の幅を拡大した。

ソーラーカーチームでは、今年度コロナ禍における様々な活動制限がある中で、チームの技術力が下がってしまったことが最も大きな問題となった。そこで、実践の場(レース)を作るため、ソーラーカーチームでは「Telemetry Challenge(初参戦)」「World Green Challenge(初参戦)」、電気自動車チームでは「World Econo Move」「NatsEV競技会(初参戦)」に参戦し、それぞれの大会に向け車体の整備、開発を行った。また、これらのレース参戦に向け、1、2年生を中心に技術的な勉強会の実施などチームの技術力向上に力を入れた。2023年にオーストラリアで開催予定の「BRIDGESTONE World Solar Challenge 2023」に向けた新型ソーラーカーの車体開発や、次年度参戦予定の電気自動車レースに向けた新型電気自動車の車体製作に取り組んでおり、活動が制限されている中で最大限の活動を行った。



▶ 電気自動車チーム

東海大学学生ロケットプロジェクト

湘南

達成目標

2020年度打ち上げ実験を中止したため、技術継承と新入生の獲得ならびに教育の実施、団体目標の再設定

学びのテーマ

4つのアセスメントの達成

リーダー

サブリーダー

広報リーダー

会計

アドバイザー

コーディネーター

鈴木遼太郎

石黒侑弥

小林郁晴

田村和樹

加藤亮太

那賀川一郎

森田貴和

宮西宏明

工学部航空宇宙学科

工学部材料科学科

工学部航空宇宙学科

工学部航空宇宙学科

工学部航空宇宙学科

工学部航空宇宙学科航空宇宙学専攻

工学部航空宇宙学科航空宇宙学専攻

サイエンステクノロジーカレッジオフィス

3年

3年

3年

3年

3年

(参加人数 53名)

活動概要

学生主体でハイブリットロケットの設計から製造・実験・打ち上げを行っている。最終団体目標は宇宙の定義とされる高度100 km の到達とし、中間目標として高度10 km と定めている。プロジェクトメンバーは燃烧班・構造機構班・計測制御班へと配属され、夏冬2回実施される秋田県能代打ち上げ、北海道大樹町打ち上げ実験を通し実践的な知識の習得と学生ならではの創作力を育むことを目的とする。



▶ プロジェクトメンバー募集説明会

プロジェクトとしてコロナ禍にどのように向き合って活動したか

学生ロケットプロジェクト(以下、TSRP)の2021年度は良くも悪くも多くの経験をした年となった。中間報告会・最終報告会での発表で述べたとおり、TSRPが直面した最大の問題は技術継承の欠如にあり、この問題は2020年度の影響から尾を引いており現在に至っている。TSRP最高学年である3年生は2020年度にコロナ禍での活動制限によるオンラインの弊害から、活動という活動を行えず、その状態で2021年における新入生の歓迎と教育の実施がとても苦しかった。その反面TSRPのスローガンともいえる「学生主体である団体」とは何か?「プロジェクト活動」とは何か?を見つめ直す機会ともなった。ここ2年で迎えた新入生含め全員が初心者である我々は、上下関係なく対等に物事を議論し、分からないながらも切磋琢磨できた実感している。



▶ プロジェクトメンバー募集説明会にてランチャー立上げ

一方で、最終目標「高度100 km」という漠然とした目標に立ち向かうには知識と技術が不足していた。その結果、夏渡航の中止から始まる団体内士気の低下と退団するメンバーを発生させてしまった。そこで前期の反省を活かすべく中間報告会後開催した「OBOG交流会」でかつてのプロジェクトメンバーに現状を相談することで、問題点を浮き彫りにし、学内にOBOGを招き入れての勉強会の実施や、プロジェクト体制の見直しを行った。そのおかげもあり、冬渡航に向けた士気の向上や技術の補填による実験の実施に成功し、また後期ではオンラインでの活動も積極的に参加した。慶応大学をはじめとする天文サークル団体との交流「天文冬の陣」や、宇宙分野に精通する団体との交流「ロケット交流会」、なかでも高輪イラストサークル様へ依頼した大樹町打ち上げポスター製作は完成度としても高く、学内を超えた他団体との交流を行えた。以上のことを「4つの力」のアセスメント観点から見ると、「自ら考える力」・「成し遂げ力」・「集い力」・「挑み力」全てを達成できたと実感している。なかでも2020年度は十分に成し遂げられなかった「集い力」の達成は、次年度以降も継続して行っていきたい。



▶ 「大樹町打ち上げ」ポスター

Tokai International Communication Club

達成目標

参加者に多文化と関わる魅力を広める発信源となってい

学びのテーマ

積極的に多文化共生に触れて、得た経験を発信する姿勢を学

リーダースーパーリーダース

落合真輝
櫻井七瀬
車 多愛
広報リーダース
会計
アドバイザー
コーディネーター

落合真輝
櫻井七瀬
車 多愛
芦澤秀乃香
小田侑斗
田口香奈恵
雨木秀文

工学部動力機械工学科
政治経済学部経営学科
観光学部観光学科
教養学部国際学科
工学部航空宇宙学科航空宇宙専攻
語学教育センター留学生支援教育部門
スポーツプロモーションセンター

2年
2年
2年
2年
2年
2年

(参加人数 69名)

活動概要

多文化共生社会の実現に向けて、以下の3つの企画を、主にオンラインツール (Zoom など) を用いて行った。

①にこティー教室：外国にルーツを持った子供たちへの学習支援。

②異文化理解ワークショップ：異文化理解を深めるために全国の人々を対象にした勉強会や多文化を知ってもらうためのイベント。

③Foreign Students Communication：留学生と日本人学生の交流。

またそれ以外にも、ハワイ大学とのオンラインでの交流や建学祭への動画投稿を通じた参加なども行った。



▶ TICCオンラインミーティング

プロジェクトとしてコロナ禍にどのように向き合って活動したか

TICCが行った主な3つの活動①にこティー教室、②異文化理解ワークショップ、③Foreign Students Communication)を通した上での、最終報告会のテーマに沿ったプロジェクト活動内容との向き合い方としては、以下の2つに集約される。

1つ目は、ミーティングを通したメンバー間や先生との信頼関係の構築があげられる。まず、「自ら考える力」という観点からは、ミーティングの際に幹部などが率先して発言することにより、全体でも意見が出しやすいような雰囲気づくりを意識的に行うことができた。またメンバーひとりひとりのモチベーションを保つため、対面を積極的に取り入れたミーティングや行事を行い、それによりメンバー間での強固な信頼関係を築くことができ、こういった活動により、「集い力」を成し遂げることができた。そして、「成し遂げ力」としては、プロジェクトとSDGsとの関係性についてメンバー全体で考える場を設けることにより、国際的な問題解決案であるSDGsなどへの深い理解などを通して、より国際的な事柄を学べる機会を提供することができた。また毎回のミーティングでは、前回の反省点の確認と改善を意識した話し合いを行うことができ、メンバーひとりひとりが、例えば失敗をしても改善案を考え、物事をより良い方向にもっていくといった前向きな姿勢でプロジェクト活動に向き合うことができた。

2つ目に、グループディスカッションなどを通した議論も、最終報告会のテーマを意識した活動としてあげることができる。SNSなどを通して日頃の活動を広げ、メンバーの積極的な参加を促すといった「集い力」を意識した活動を行った。話し合いでは、基本的にいくつかのグループをつくり、その中で出た意見を集約し、プロジェクト全体の考えをまとめていくといった方法をとることにより、「自ら考える力」も念頭に入れた活動も行うことができた。

上記2点のような成功点がある一方で、失敗した点としては、対面活動を秋学期から全面的に取り入れたことにより、一部メンバーの、プロジェクト活動やミーティングへの継続的で十分な参加が望めなかったといったことがあげられる。そのため、対面もオンラインもあり大きな差がないような手法を取り入れる必要があった。加えて、国際的な貢献活動などに興味を持たせる機会を提供できた反面、実際には十分に実行に移すことができたとは言えず、活動の場が少なかったため、プロジェクト活動として実現させることも前提にいれた活動を行っていく必要性も大きく感じた。最後に、途中から入った新規メンバーや積極的な参加が望めなくなった人々への措置や対応も、あまり寛容ではなかったということも改善点としてあげられた。コロナ禍ということもあり、メンバーそれぞれが社会状況に対応しながらプロジェクト活動を行わなければいけなかったため、そういった人々への配慮が難しく、自分たちの活動を行うことで精一杯であったことに留意する必要があるが、今よりも寛容な体制のもとでの活動が求められているように感じた。



▶ Foreign Students Communication(FSC)の様子



▶ 「異文化理解ワークショップ」ポスター

3.11生活復興支援プロジェクト

達成目標

活動の終わりに向け、残された課題を一つ一つ解決し、持続可能な地域にする

学びのテーマ

様々な人・団体との繋がりがから得られたものを取り入れ、活動をより良くするための方法を学

リーダースーパーリーダース
広報リーダース
会計
アドバイザー
コーディネーター

今井 響
越光 蓮
菊地優衣
竹内悠人
浅井亜希
月岡由美子
小澤伸将
(代理)

理学部情報数理科
工学部建築学科
工学部建築学科
政治経済学部経済学科
文化社会学部北欧学科
スチューデントアチーブメントセンター
スチューデントアチーブメントセンター

3年
4年
3年
3年

(参加人数 41名)

活動概要

東日本大震災から10年がたった現在の被災地は、徐々にコミュニティが形成されつつある。本プロジェクトの活動は、地域のさらなるコミュニティ発展や、震災の風化防止のため東北の当時の状況から現在までの復興の歩みを伝えることによる「地域の魅力発信」を目的としている。また今年度は、住民の方の主体的な活動が増えたことやコロナ禍もあり、今までとは異なるアプローチで課題に取り組む。



▶ 大門市にて、三陸ワカメのみそ汁無料配布

プロジェクトとしてコロナ禍にどのように向き合って活動したか

本プロジェクトは2021年度の達成目標として「活動の終わりに向け、残された課題を一つ一つ解決し、持続可能な地域にする」を掲げた。活動から10年目であった2020年度を節目とし、最終年度と位置付けていたが、地域に残された課題があることやコロナ禍による活動範囲の縮小により現地活動に取り組みなかったことから、11年目以降も継続し、課題に対して新たな視点を取り入れて、取り組んでいくことが目標であった。しかし、コロナ禍が収束する気配無く、本年度も現地に赴くことができず、また新たな視点を持った現地への取り組みを検討するも、本プロジェクトは現地に足を運び、顔を合わせることで成り立っているところが大きいことを改めて認識させられた2021年度であった。

本年度の活動の中心は、風化防止活動やプロジェクト内の勉強会などの遠隔による活動であった。一つ目は「新メンバー勉強会」である。本年度の新メンバーが1,2年生合わせて16名加わってくれたことから、東北や震災などに興味を持ってもらうこと、メンバー間の交流や意見交換の場にすること、それから2021年3月に完成した活動10年史を活用することの3つを目的として実施した。全6回に分け「泊地区」「相川地区・小指地区」「風化防止活動」について、活動10年史を全メンバーに配布し教材とすることで、わかりやすく詳しい説明を行った。各回1時間程度の説明の後、30分程度意見交換の時間を設け、話を聞いてみての感想、東北について知っていること、自身の震災体験など様々な話から交流を行った。結果として、日々のMTにおける理解度などの向上があったほか、建学祭企画を新メンバーが中心となって練り上げ成功させることができ、身に付けた知識を生かすことができた。

二つ目は東北福祉大学、神戸学院大学、工学院大学が主催の「東日本大震災から10年 未来へ思いを紡ぐ大学生プロジェクト」への参加である。全11大学から80名近くの学生が参加し、復興支援活動に関わってきた学生たちの知見・想いを共有した。学生の視点を生かした防災・減災について話し合い、継続的な連携活動や有事の際の情報共有・活動拠点としても有効なネットワーク作りを目指す企画である。本プロジェクトからは10名程度が参加し、オンラインでの講演・交流会では、語り部活動についてや復興庁の活動についてなど今まで知る機会の少なかったことの知見を得ることができた。また、学生間のディスカッションでは被災及び語り部の経験者の視点からの意見のみならず、被災や復興支援活動などの未経験者からの率直な質問や感想などがあり充実した議論に繋がった。このような点から他の学生団体との交流の重要性をより感じる事ができたため、次年度以降も機会を作り行っていきたいと考える。

本年度の学びのテーマは「様々な人・団体との繋がりがから得られたものを取り入れ、行う活動をより良くするための方法を学ぶ。」であった。行うことのできた企画は少なかったが、上述の大学生プロジェクトや、チャレンジプロジェクト間での交流会に初めて参加し、普段の活動では気が付きづらい本プロジェクトの良いところや改善点などを知ることができた。また、本プロジェクトに無い他団体独自の取り組みなども知ることができ、活動に対する考え方の引き出しを増やすことができた。しかし、取り入れての実践まではできなかったため、今後どのようにしたら活動に落とし込んでいけるかを検討する必要がある。したがって、学びのテーマを完全に達成することはできなかったが、引き出しを増やすことができたことから活動をより良くする方法を知識として学ぶことができたと考える。



▶ 結の道整備



▶ 夏のこども教室

Beijo Me Liga

湘 南

達成目標

コロナで下がりがきつた心を振り払うような、活気のあるマルチカルチャー
キャンプを行う

また、昨年よりも多くの外国人学校の生徒との交流を行い、
互いが笑顔になれるような活動をしていく

学びのテーマ

どのようにすれば文化等の差異がある子供たちに影響を与えることができるかを考察、実施する能力を学ぶ

リーダー	小澤後史	文学部英語コミュニケーション学科	3年
サブリーダー	島村育成	文学部英語コミュニケーション学科	3年
	松本萌子	文化社会学部心理・社会学科	3年
広報リーダー	川元凌太	理学部情報数理学科	3年
会 計	山縣のん	健康学部健康マネジメント学科	3年
アドバイザー	小貫大輔	教育学部国際学科	
コーディネーター	藤岡未紀	スチューデントアチーブメントセンター	

(参加人数 72名)

活動概要

目的としては学校訪問を含めた外国にルーツを持つ子供たちとの交流をもとに彼らの視野に対し少しでも影響を与えることにある。また、概要としては、前述したように外国にルーツを持つ子供たちとの交流をするべく実際に学校へ足を運び交流を行う他に我々が開催しているマルチカルチャーキャンプへ招待し普段触れることのできない文化等に触れてもらい彼らの世界に影響を与えることとなっている。



▶ マルチカルチャーキャンプ

プロジェクトとしてコロナ禍にどのように向き合って活動したか

今年度も基本的にオンラインでの活動を余儀なくされたため、ほぼ全ての活動で企画、運営などの場面で常に試行錯誤をしながらプロジェクト運営をしてきた。対面活動ですらコミュニケーションを取ることが難しい子ども達との国際交流では、考える力と新たな活動に恐れずに取り組む挑み力が試され、成長が見られた面もあれば、課題が残る場面もあった。時にアイデアに行き詰まることもあったが、プロジェクトメンバーが一丸となって協力し助け合いながら活動した。オンライン活動では対面活動に比べ、相手と交換できる情報量に圧倒的な差があり、回線の状況次第で会話のキャッチボールに時間がかかることがある。このことから、いかに子どもたちとスムーズな交流ができるかを考え、離れていても各学校との縁がより強固になるように努めた。交流方法にzoomを用いて、聴覚を中心とした情報ではなく視覚的情報を中心的とし、外国籍の子どもたちにクイズを出題したり、実物を見て真似て簡易的に制作できる風鈴などの企画を行った。コミュニケーションを取ることが難しい場面もあったが、制限のある中で子どもたちと交流するミーティングでは、コロナウイルスの規制緩和に備え、いつか子どもたちと行えるようなら運営を行うことで、一貫した成し遂げ力を養うことができ、毎回のミーティングで得られる良い考え続けながら活動をしてきた。オンライン活動は、場所を問わずに環境さえ整っていれば、世界各地とつながることができ、扱い方次第では無限の可能性を秘めている。しかし、対面活動に比べると楽しさや充実度が減少しがちでモチベーションが下がりにくい傾向にある。これらを踏まえた上でさまざまな活動を目指してきたが、やはり活動が難航することが多かった。ミーティングの出席率の低下から、メンバー数の減少、各学校とのつながりが希薄になり様々な課題が出現した。これらの課題に対して望ましい対応はできず、改善を測ることがほぼできなかった。これはプロジェクトの存続に大きく関わることであるため、事実を再認識し、しっかりと受け止めた上で次年度に活かしたいと考えて活動していた。コロナ禍に入ってもうすぐ3年目に入るが、コロナウイルスを踏まえたイベント活動やミーティングをしていくべきであり、子供たちのためになる活動にしていきたい。



▶ 学生キャンプ



▶ 建学祭での様子

Tokai Dream Space Team

湘南

達成目標

企業、地域との連携で、小学生から社会人を対象とするICTものづくりイベントを成功させる

学びのテーマ

ものづくり、プログラミング、チームビルディング／チームワーク、
プロジェクトマネジメント、S&MA(Safety and Mission Assurance、
DX(Digital Transformation)

リーダー	竹澤 崖	工学部航空宇宙学科学航空宇宙学専攻	4年
サブリーダー	長谷川奈之輔	工学部材料科学科	2年
広報リーダー	高橋 浩	工学部精密工学科	2年
会計	天野由紀子	工学部精密工学科	4年
アドバイザー	白澤秀剛	理系教育センター	
	岡田 工	スチューデントアチーブメントセンター	
コーディネーター	喜友名浩史	ビーンウォイス	

(参加人数 47名)

活動概要

現代社会では、イノベーションを実現するだけでなく、確実に社会実装につなげられる人材が求められている。そこで、そのような人材になるために必要とされる力(革新性と実現性の両立)を題材としたイベントを主催することで、参加者に楽しみながら社会から求められている力を体感してもらい、イベントを通じた成長を実感してもらう。



▶ わくわく宇宙探検

プロジェクトとしてコロナ禍にどのように向き合って活動したか

TDSTはイノベーション人材の育成を目的とし、企業や地域との連携で、小学生から社会人を対象とするICTものづくりイベントを成功させることを目標に1年間活動した。

主なイベントとしてはIntelligent Water Rocket Competition 2021、通称IWRC2021を開催した。IWRC2021とはマイクロコンピュータなどのミッション機器を搭載したペットボトルロケットの打ち上げを行う高信頼性ものづくり体験イベントである。参加対象は13歳から社会人としており、2～6人でチームを組み、イベントに参加していただいた。参加者はマイコンを使ったユニークなミッションに取り組むことによって「ものづくり」を、チームで協力して計画的にペットボトルロケットを設計・製作・試験を行うことで「チームワーク・プロジェクトマネジメント」を、安全にペットボトルロケットを作り、楽しみながらミッションを成功させることで「S&MA」を、それぞれ体験していただいた。IWRC2021は結果として参加チーム数が12チーム、参加者総数が44名、協賛・協力・後援企業は7社であった。参加者チームは高校生チームや大学生チーム、中学生から社会人まであり、今回のIWRC2021は新型コロナウイルスの影響により過去のIWRCに多くの変更を加え、開催に、物品の受け渡しを手渡しから郵送にした。これらの変更を加え、IWRC2021は9月から10月に安全信頼講習会、3日目に試験打ち上げ、4日目に競技大会を行った。1日目の競技説明会は10月10日までに参加者の集客を電話やメールで行い、参加者をteams上のチームに招待した。イベントは無事全チームに参加していただいた。内容としてはプロジェクト代表による競技の説明と、協賛・協力企業さまからの審査基準についての説明が行われた。

2日目の安全信頼講習会は10月17日に1日目と同様の方法でオンライン開催をした。この講習会では「安全を考える」について講習編と演習編の2部に分けて有人宇宙システム株式会社様よりご講演をいただいた。参加者にとってペットボトルロケット製作に必要な安全に関する知識を学ぶことが出来た良い講習会となった。

3日目の試験打ち上げは11月28日に希望チームのみ野球場で行った。この試験打ち上げには4チームが参加し、全チーム無事打ち上げを行うことができた。TDSTとしてはペットボトルロケットランチャーの動作確認を行うことができた。また、対面形式のイベントが初めてである1、2年生にとって競技大会のよいリハーサルとなった。4日目の競技大会は悪天候により当初予定していたチームがペットボトルロケットを打ち上げた。メンバーが協力することで無事イベント運営を行うことができた。IWRC2021の総括としては、企業や地域との連携で小学生から社会人を対象とする活動から得た学びとしてはIWRC2021の日程決定、開催判断、参加者対応から「自ら考える力」、「集い力」、参加者募集のためのポスター作成や参加者の提出物の管理から「挑み力」、IWRC2021



► Intelligent Water Rocket Competition(IWRC)



▶ わくわく宇宙探検

Sunflower

湘 南

達成目標

シエムリアップの校舎建設のために必要な資金を調達する
また、物資支援としてペンやノートなどを支援する
さらに、得た経験や知識の情報発信を行うことでカンボジアの現状を
広く共有していく

学びのテーマ

多様化し変化していく国際社会に視野を広げ自ら考える力を養い、
変化に対応していくことで対応力も身につける
また、得た知識と経験の発信を行うことで構成力を養う

リーダー	鈴木晶太	政治経済学部経営学科	3年
サブリーダー	星野真輝	文学部歴史学科考古学専攻	3年
	近藤大介	教育学部国際学科	3年
広報リーダー	立石一登	文化社会学部広報メディア学科	3年
会計	佐藤日花里	教育学部人間環境学科	3年
アドバイザー	杉本 凜	文化社会学部アジア学科	
	妻鹿ふみ子	健康学部健康マネジメント学科	
	竹内友章	健康学部健康マネジメント学科	
コーディネーター	関根広大	スポーツプロモーションセンター	
	山梨佑季	グローバルシブシブカンパニースタッフ	

(参加人数 39名)

活動概要

Sunflowerは、カンボジアの子供達の教育支援のため、現地の方々との交流や日本での募金、物資支援を主な活動としている。現地での活動としては、建設会社の方と協力し学校建設計画について話し合い、人々との交流を通して現状を調査する。日本ではSNSや、イベントなどを通しカンボジアの魅力を発信する。物資支援では文房具類などを支援する。以上の活動から、私たちは現地の子供達に夢を持ってもらうことを実現していく。



プロジェクトとしてコロナ禍にどのように向き合って活動したか

私たちは今年度も引き続きカンボジアへの教育支援を行い、将来的に学校を建設するための資金を集めるために活動を行った。コロナウイルスがある程度収束するまでは広報活動を主に行いながら、コロナ禍だからできる活動を模索して活動した。情勢が落ち着いた頃を見定めて募金活動として前年度に延期しているクラウドファンディングを行うための準備を進めた。さらに、対面での募金活動も状況を見定めながら再開するための準備を進めた。対面活動を再開しようとした理由としては、クラウドファンディングでは集めることのできる資金の見通しが不鮮明なため、社会の状況が落ち着き次第対面での募金活動も行っていきたいと考えていたからである。対面の募金の日程は固定せずに各月のメンバーの予定に合わせて設定し、学校建設には多大な資金が必要なため長期的な目標として活動していく計画だった。しかし、オミクロン株の流行によって再開しようとしていた対面での募金活動を中止にした。



▶ カンボジアフェスティバル

広報活動ではSNSやWebページを通して、多くの人々に私たちの活動を認知してもらい、カンボジアの現状を知ってもらうことでコロナ禍での支援者を増やすことに繋げることができたと考える。学校外の人々との対面活動が再開できるか不明であったため今年度も広報活動に力を入れて活動した。物資支援では、カンボジアの校長との連絡によって物資が不足気味であるということを教えていただいたため、鉛筆やノート類など教育を受ける上で必要不可欠な物や、子供たちが生活をしていく上で必要になるものを支援していこうと考え伊勢原高等学校と協力して物資を発送する準備を進めた。今年度で活動が終了することが決まってからは伊勢原高等学校側がメインとなって準備を進め、3月中には発送した。

次に現地での活動についてだが、夏に行く予定であるカンボジア渡航を3月に移すことで対応したがオミクロン株の流行によって無期中止となってしまった。渡航した際の内容としては引き続きブノンペンとシェムリアップの子供たちとの交流と現地調査を行う予定であった。プロジェクトを解散する決断をした大きな理由としては、渡航のノウハウを持っている3年生が活動に参加できなくなるからである。残された下級生たちは対面で会ったことのない相手に対して支援を続けることになってしまうため、このような判断をすることになった。

プロジェクトコラボでは各チャレンジプロジェクトが抱えている問題やそれに対する対策などを話し合うことができ、活動に対する様々な案を考えることができた。このような機会を増やしていけばお互いがお互いを成長させる相乗効果を生むことができるのではないかと考える。

私たちSunflowerは活動を通して、日本にいてだけでは理解することの難しい国際的な問題について考えることができたと思う。世界的な問題はたくさんあるが、その中でカンボジアという国に絞り、身をもって現状を実感することでグローバル化の進む社会で多角的な思考を養うことができた。さらに、実際の国際問題に対して様々な方向からアプローチをかけることで「4つの力」を学び、スチューデントアチーブメントセンターの意図である「社会で必要とされる人材」を目指すことができた。

Takanawa共育プロジェクト

高 輪

達成目標

社会状況にあった新しい企画を行い、地域を活性化させる

学びのテーマ

地域貢献を通じて、社会に求められる学生の役割を考える

リーダー	油谷 隆	情報通信学部情報メディア学科	3年
サブリーダー	大田 雅宏 和田京子	情報通信学部情報メディア学科 情報通信学部通信ネットワーク工学科	3年 3年
広報リーダー	東條隆之介	情報通信学部情報メディア学科	3年
会計	日下美幸	情報通信学部情報メディア学科	3年
アドバイザー	佐藤弘三 山野祐子	情報通信学部通信ネットワーク工学科 情報通信学部情報メディア学科	3年 3年
コーディネーター	吉村太右 高橋直也	グローバルシズンカレッジオフィス 高輪プラント グローバルシズンカレッジオフィス 高輪プラント	

(参加人数 31名)

活動概要

東海大学(高輪校舎)が高輪地区にとって必要な存在として認識してもらえるように、地域を盛り上げる活動をしていく。そのために地域の様々なイベントに積極的に参加・協力するだけでなく、主催イベントを企画・運営していく。また、コロナ禍で様々な活動が制限される現在の社会状況に応じて、オンラインでの活動を取り入れる等、新たな挑戦もしていく。これらの活動を通じて大学と地域の良好な関係を築き「地域の活性化」を目指す。



プロジェクトとしてコロナ禍にどのように向き合って活動したか

私たちは今年度の達成目標として「社会状況にあった新しい企画を行い、地域を活性化させる」を掲げて活動を行った。昨年度に続きコロナ禍という厳しい社会状況に置かれ、対面での活動が制限され、従来通りに実施するはずであったテニスクールや地域清掃等の定期活動は行えなかった。そこで、昨年度の経験を生かし、オンラインでの活動に力を入れて取り組み、「TKPといっしょ」というライブ中継式の子ども向けイベントを企画・実施した。このイベントは、赤と緑のレンズの3Dメガネを作製し、立体視を体験するといった内容である。当日は大学と児童施設をZoomで繋ぎ、作製方法と3Dに見える原理を子どもたちに説明しながら実施した。製作するだけではなく、「どうして3Dに見えるのか」といった知的な好奇心を刺激し、興味関心を持ってもらえるよう工夫した。イベント終了後には、「レンズの色を変えたらどう見えますか」等の質問があり、子どもの関心をうまく引き出すことができ、イベントの目的を達成できる結果を残せた。

コロナ禍が落ちついてきた今年度の後半は4つの対面活動を行うことができた。1つ目は「MCに行えるよう応募作品の並べ替えや受賞作品の額入れ等を行った。2つ目は建学祭でのTKPを展示し、来場者に説明した。当日は学生だけでなく、地域や活動に携わった方々にも足を運ばせたい」という港区青少年委員会との共同企画で、参加者が安全に目的地に到着できるように誘導などのサポートを行った。4つ目はクリスマスイルミネーションである。例年続けてきた活動で、クリスマスツリーや電飾を屋外に設置した。今年度はコロナ禍で校舎に滞留する学生が少ない状況だったため、点灯式をYouTubeでライブ配信して、多くの人に見てもらえるよう工夫した。

今年度の活動を通して、「TKPといっしょ」を企画・実施したように、コロナ禍の社会状況にあわせて、ライブ中継という新たな試みに挑み、ひとつのイベントを完遂させることで「自ら考える力」と「挑み力」を身につけることができた。また、対面のイベントでは、学内に集まっただけの準備時間が制限されていた中でも、オンラインミーティングを活用して打合せを行い、限られた対面活動の時間を有効的に使って企画を完成させることができ、「集い力」と「成し遂げ力」を培ってきた。ライブ中継を用いた活動が初の試みだったため、「TKPといっしょ」では子どもたちと先生たち、オンラインミーティングに参加できなかったメンバーへの情報共有が遅れたことで準備期間とオンライン両面での活動を活発化し、地域を盛り上げていきたい。



▶「MOA美術館港区児童作品展」の選考会運営補助



▶ クリスマスイルミネーション

先端技術コミュニティACOT

達成目標

コロナ情勢下での継続的なドローン訓練、アプリ開発で得た技術や知識での地域貢献

学びのテーマ

社会で求められる知識・技術に対する挑み力と社会に対するコミュニケーション力を学ぶ

熊 本

リーダー	丹澤健太	農学部応用植物科学科	3年
サブリーダー	日高涼太	農学部応用植物科学科	3年
	横井秀音	基盤工学部電気電子情報工学科	2年
広報リーダー	後藤尚斗	基盤工学部電気電子情報工学科	2年
会計	古田奈津実	農学部応用植物科学科	3年
アドバイザー	八尋剛規	経営学部観光ビジネス学科	
	佐松崇史	基盤工学部電気電子情報工学科	
	福岡 稔	九州教養教育センター	
コーディネーター	加藤純一	フェニックスカレッジ熊本オフィス	
	六嘉孝裕	フェニックスカレッジ熊本オフィス	

(参加人数 28名)

活動概要

2021年度は新型コロナウイルスにおける活動自粛に伴い、制限された活動になることが予想される。そのため、創意工夫を行い自分たちの技術向上と技術を生かした社会貢献を目標とし活動する。主な活動としては熊本県警や他大学の学生と協力し、サイバー犯罪の防止を目的としたサイバー防犯ボランティア、ドローンを用いて空撮を行う。また、イベント参加の許可が下りた時のみ、依頼されたイベントへの出展をする。



▶ サイバー防犯ボランティア

プロジェクトとしてコロナ禍にどのように向き合って活動したか

本年度の活動を通して我々は特に4つの力の中で「集い力」について大きく成長することができた。本プロジェクトでは地域に向け自分たちの持つ知識、技術をもとに社会貢献活動を行っており、新型コロナウイルス感染症が流行している中でも感染防止対策に努め児童発達支援スクール「ままとこテラス」の児童の訪問依頼への対応、自由ヶ丘幼稚園からの空撮の依頼、開新高校の大学見学の際のチャレンジプロジェクトの活動紹介、熊本県警と熊本学園大学、熊本県立大学、崇城大学と協力して行っているサイバー防犯ボランティアなどを通して、地域コミュニティの課題解決に取り組んだ。子供たちの目線に立って楽しんでもらえるよう、伝わりやすいように努力すること、社会人の方と関係を持つことで社会人としてのマナーを学ぶことなど幅広い年代の方々とかかわることで、社会に通用するコミュニケーション能力を身に着けるという学びのテーマも達成することができた。

また本年度は対面で大人数での活動をできるだけ避ける必要があり、例年行っていた対面でのPC組み立て教室を本年度は少人数で組み立ての様子を動画で撮影し、動画を編集して一般公開するというかたちで行うこと、サイバー防犯ボランティアの通報活動をDiscordを用いて画面共有しながら行い、対面で行っていた時と同じ要領で他メンバーと画面を見ながら相談できるよう工夫するなどして、オンラインで行えるものはオンラインで行うようにし、メンバー間でオンラインで動画編集のノウハウについての勉強会を開くなど、例年行ってこなかった分野にも挑戦するなど新しい活動形態に対する意見を出し合い、それを実行することで「自ら考える力」「挑み力」の向上につながった。

また達成目標に掲げている継続的なドローンの訓練では、感染防止対策を徹底した上で少人数で行い、各メンバーがそれぞれ地方航空局に飛行申請を出すために必要な10時間以上の操縦経験を得ることを目指すとともに、ドローンに関する法律や申請書の作成方法などの勉強会を行った。このような活動を通して本年度のプロジェクトの目標を達成することができ「成し遂げ力」についても成長を感じられた。

また来年度に向けた課題として本プロジェクトの活動の大きな柱の一つであったETロボコン等の大会への再挑戦があげられる。昨年度に引き続き本年度も1年間のブランクとメンバーの減少などを加味し、今年度ETロボコンへの参加を見送ったが、来年度以降ETロボコンやそのほかにもプロジェクト内で興味のある分野の大会参加を検討し、活動のテーマである「社会で求められる知識・技術に対する挑み力」をプロジェクト全体で身に着けて行けるよう取り組んでいきたい。



▶ ロボット教室



▶ 空撮活動のためのドローン訓練風景

阿蘇援農コミュニティプロジェクト

達成目標

阿蘇援農コミュニティプロジェクトの活動を次につなげること。農家さんとのつながりをつなぎなおすこと。学生一人一人が農業に触れる機会を増やし、援農活動を増やすだけでなく、農家さんとのやり取りを増やし地域活性につなげる

学びのテーマ

農業に対する知識、技術の習得と熊本の地域活性と社会貢献

リーダー	佐藤友希	農学部応用動物科学科	3年
サブリーダー	佐藤友里江	農学部応用植物科学科	2年
広報リーダー	洲上美都	農学部応用植物科学科	3年
会計	河井大明	農学部応用植物科学科	4年
アドバイザー	阿部 淳	農学部応用植物科学科	
コーディネーター	高橋誠二	熊本オフィスキャリア就職担当	
	馬原賢信	熊本オフィス教務担当	

(参加人数 81名)

活動概要

阿蘇援農コミュニティプロジェクトは主に熊本の阿蘇地域を中心に、農家さんのもとへ訪れ、作業を手伝うという活動を行っている。しかし、ただボランティアとして活動するだけでなく、学生は労働力提供を、農家さんは知識と技術を教えるという相互関係を成立させることに重点を置き、取り組んでいる。創立から十年以上が経ち、現在では阿蘇以外での活動を行ったり、テレビや新聞などのメディアに取り上げていただいたりと、熊本県で少しずつその活動が認められてきている。



▶ 援農活動の様子①

プロジェクトとしてコロナ禍にどのように向き合って活動したか

今年度、阿蘇援農コミュニティプロジェクトは”繋ぐ”ことをテーマに活動してきた。背景として、主に活動してきた南阿蘇村と物理的距離があることや、コロナにより活動ができていなかったことにより、農家さんとの関係が疎遠になっていたことがあった。農家さんと学生との繋がり、今後も続いていくような組織づくり、学生同士の縦と横の繋がりを深くすることに注力して活動してきた。そうやって活動していく中で、学びや発見があった。
 【自ら考える力】対面活動がメインの援農活動を、コロナ禍と言って活動を行わないのではなくオンライン企画などを行った。また、対面で活動を行えるよう、受け入れ農家さん側と相談し、こまめに連絡を取り、スムーズに活動ができるよう、学生だけではなく、双方向の意見を取り入れ、活動を行った。今、援農として何が農家さんの為にできるのかを自ら考え活動してきた。
 【集い力】全体ミーティングを月一回、幹部ミーティングを毎週行った。メンバーとの話合いや交流をすることで、これからの援農活動をどのようにしていくか、より多くの意見を取り入れることを意識した。今年度作成したTシャツづくりもみんなの意見が形になったものの一つである。東海坂の清掃では、阿蘇復興への道というユニークプロジェクトと協力した活動を行った。また、南阿蘇農家さんツアーでは、旧阿蘇校舎があった地域である黒川地区の方々にお弁当をつくってもらった。熊本地震の話聞く機会もつくり、援農の過去について知ることができた。

【挑み力】援農活動を通しての農作業だけではなく、合鴨解体、飼料作り、マルシェ開催など、新たな挑戦をした。マルシェは、農作物と消費者との関わり、農家さん同士の関わり方などを普段とは違う視点学ぶ機会にもなった。また、熊本地震により、大学の場所が南阿蘇から熊本市内へ移ったことで農家さんと学生の距離が離れていた。農家さんツアーという新たなことに挑戦したことで、離れていた農家さんとの縁を繋ぎ直すことができた。新たにはじめた畑づくりを通して、農家さんとの繋がりだけではなく学生同士の繋がりがりや、学生自らが農業に対する楽しさを見つける機会となった。

【成し遂げ力】いろんなことに挑む中で、沢山の課題にもぶつかった。コロナにより活動が中止になったり、何が農家さんのためになるのか考えたり、色んな壁にぶつかった。農家さんはもちろん、南阿蘇の行政の方や黒川地区のみなさんと話し合い、協力することで、ツアーやイベントを成し遂げることができた。

【反省・課題・展望】ツアーなど農家さんを知ることに偏った援農活動が多かったため、せっかく援農で得た技術・知識が実践できなかったことが課題である。また、参加者が増えると移動手段が減り、結果、希望者全員の援農活動ができなかったこともあった。農家さんツアーを通して、今年度つながりを持つことができた農家さんを援農活動で来年度から訪問していく。それにより、今回1件にずっと行くのではなく、ツアーで多くの農家さんを知れたことにもっと意味があるのではないかと考える。また、農家さんの現場は基本車で約1時間、近くに畑がなく、多くて週に1、2回しかいけなかった。しかし、農家さんツアーや援農活動によって、多くのことを知り、実践する場が欲しいと考えたときに、熊本市内のキャンパスの裏に畑を借りることができた。これにより、援農の自分たちの畑で、援農活動から得た知識・技術の実践を行うことができるようになる。畑づくりや今までの援農活動など、なるべく希望者全員が参加できるように援農活動を増やし、人数の分散をすることでより多くの人に農にふれる機会をつくり、農家さんのために学生の学びになる援農活動を行いたい。



▶ 援農活動の様子②



▶ 援農活動の様子③

阿蘇は箱舟プロジェクト

熊 本

達成目標

オオルリシジミやダイコクコガネ、アソノコギリソウなどの阿蘇地域に生息・自生する貴重な動植物を守るために除草活動など阿蘇の草原を維持する。また、イベントなどを通じて多くの人々に阿蘇の自然を知ってもらう

学びのテーマ

活動の計画力を身につけるとともに、広報活動で情報発信を行うための構成力を磨く

リーダー	中内拓海	農学研究科農学専攻	2年
サブリーダー	金子拓未	理学部情報数理学科	4年
	永野智大	農学研究科農学専攻	2年
広報リーダー	福永一輝	農学部応用植物科学科	4年
会計	黒木伸哉	農学部応用植物科学科	
アドバイザー	村田浩平	農学部応用植物科学科	
	岡田 工	現代教養センター	
コーディネーター	金子 博	農学教育実習センター	
	永田亮也	キャリア就職担当	

(参加人数 84名)

活動概要

阿蘇地域は日本国内でも、有数の希少種や固有種が生息している草原であり、本プロジェクトが「箱舟」という名を冠する所以は、こうした阿蘇の希少な動植物が生息する環境を「箱庭」にみたと、後代へ残すことを目的としているためである。学生が主体となり阿蘇地域の方々と協力することで、オオルリシジミをはじめとした希少種の生息環境の保全を行うと共に、放牧農家の支援と阿蘇の自然の尊さを世間に伝えることを目標として実施している。



▶ 防犯パトロール活動

プロジェクトとしてコロナ禍にどのように向き合って活動したか

今年度の本プロジェクトの現状としては、メンバー数は多いが、コロナの影響があり活動できるメンバーが限定されてしまった。動植物の各メンバーがコロナ禍に合わせて、動植物の生息環境の除草作業など数少ない活動の中で、自らが考えて活動し、時には助け合うように活動ができた。活動を通じてメンバーが自ら考える力を十分に身につけられていないと感じ取れる場面も多々あったが、各活動はすべて成功を収めた。その他に、「集い力」「挑み力」「成し遂げ力」に関係する活動を行った。

「集い力」…水源の森林ボランティアネットワークの方々と連携し除草を行った。草原環境の保全活動の一環として、外部の方々とプロジェクトメンバーが意見を交わし、阿蘇の草原とその保全の意義について共に学ぶことは今後も継続すべき活動であると考えている。

「挑み力」…我々の活動は依然として、コロナ禍の影響を受け、十分な活動を行えていない状況にあったため、今年度夏に企画されていた標本展示会が中止となった。そのため、本企画の代替措置として、今年度の冬に星の観望会を行った。阿蘇地域の星空から身近な自然を学んでいただくことを目的として行われた本企画は望遠鏡をほとんど知らないメンバーが活動を通じて望遠鏡の操作を学び、星の観察を希望する人を集めて行ったことは「挑戦」であったと振り返る。湘南メンバーの提案により、阿蘇校舎との合同企画を行った。合同企画はYouTube上に我々の活動を紹介する広報活動の一環として行った。今まで、受け継いできた活動を継続して行うことに重きをおく我々の活動としては異例であり、斬新な活動であると振り返る。

「成し遂げ力」…活動全体としては、今年行われた除草活動やパトロール活動、星の観望会、合同企画であったが、これらの活動をメンバーとともに開催できたことは、まさに「成し遂げた」といえる。今年度の阿蘇は箱舟プロジェクトの活動はコロナ前に比べると十分な活動であるとは言えないが、今後、状況に合わせた企画も視野に入れて、活動をしていきたい。今後も、コロナ禍により活動に制限がかかることが予測されるが、今できることは一体何なのか、見極めたうえで活動を企画していく予定である。



▶ 除草活動



▶ 星の観望会

あにまるれすきゅープロジェクト

熊 本

達成目標

譲渡会に参加し、啓発活動を行うことで飼育している動物を捨ててしまう人を減らすことで殺処分される命を減らすこと、そして活動を通して多くの人に対して殺処分の実情を知ってもらい、命の尊さや生き物を飼育することの責任について理解してもらうこと。

学びのテーマ

命の尊さや命に対する責任について学び、対面・非対面に関わらず多くの人に啓発する力をつける

リーダー	新田智之	農学部応用動物科学科	3年
サブリーダー	橋 純平	農学部応用動物科学科	3年
	古家怜賀	農学部応用動物科学科	3年
広報リーダー	岡山あおい	農学部応用動物科学科	3年
会計	臼井達哉	農学部応用動物科学科	3年
アドバイザー	松本大和	農学部応用動物科学科	
コーディネーター	佐藤良彦	フェニックスカレッジ熊本オフィス	
	神鷹孝至	フェニックスカレッジ熊本オフィス	

(参加人数 40名)

活動概要

本プロジェクトは動物愛護団体や保護団体、県や市の職員の方々と協力し、譲渡会への積極的な参加、協力や啓発活動を行うことで動物愛護や殺処分の現状についてプロジェクトメンバーのみならず、多くの人々に知ってもらう。そして、動物を飼育することの責任や命の尊さについて考える機会をつくることや、飼育している動物を飼育放棄してしまう人や保健所での殺処分数を減らすことを目的とする。



▶ 動物園愛護祭り

プロジェクトとしてコロナ禍にどのように向き合って活動したか

4つの力の観点から、本プロジェクトの活動内容とその活動から得た学びとしてまず、自ら考える力として、プロジェクトを運営し活動を進めていく中でプロジェクトの幹部やメンバーから活動のアイデアの募集の実施、譲渡会やイベントに参加した際には参加団体の方々と協力し行動、自ら考え行動し譲渡会やイベントの運営の手助けになるような働きができるように努めた。またSNSを用いた啓発活動を行う際にはSNSで発信する情報やスライドをメンバー自ら考え作成するなど、自ら考える力を育むことができた。

集い力の観点からは、10月に行われた九州最大級の譲渡会において、本プロジェクトから20名を超えるメンバーが参加した。譲渡会では、メンバー間での協力や譲渡会の参加団体との連携を取り活動することができ、円滑なコミュニケーションを学び得ることができた。

挑み力の観点からは、今年度の活動は新型コロナウイルス感染拡大防止の観点から活動の制限が多くかけられていたが、できるだけ従来の本プロジェクトの活動を行えるように感染防止対策を徹底し、保護団体との協力関係を築くことで、コロナ禍でも多くの譲渡会やイベントに参加し、活動することができた。また、今年度から新しく活動の協力をさせていただく団体が増えたことで、初めて参加するイベントなどもあり新たな活動に挑むこともできた。

最後に成し遂げ力の観点からは、本プロジェクトの1年間の達成目標として掲げていた譲渡会への積極的な参加や啓発活動を行い、動物愛護や殺処分の現状について多くの人に知ってもらうという目標から、毎月1回程度の譲渡会への参加やイベントに参加し、参加した際には本プロジェクトの活動に関するポスター展示やステージ上での発表等を行わせていただき活動のPRを行った。また、本プロジェクトのInstagramやツイッター等のSNSの更新頻度をこれまでよりもあげて、動物愛護や動物保護に関する情報の発信や啓発を行い、譲渡会やイベントの参加者やSNSのフォロワー、閲覧者など多くの人に対して動物愛護や殺処分の現状についての啓発を行うことができた。また、参加した譲渡会においても多くの新規の里親の申し込みをいただくことができ、殺処分数の減少に貢献することができた。

今年度の活動に関する失敗や反省として、活動が譲渡会やイベントへの参加が主となり、会場の設営や撤収、受付など裏方業務が多くなってしまったため、動物とのふれあい等を希望していたメンバーからは不満が出てしまった。そのため、譲渡会やイベントの参加だけでなく、感染症対策として自粛していたお散歩ボランティア等の動物とのふれあいができる活動をさらに増やしていきたいと考えている。また、本プロジェクトが主催する譲渡会やイベントを開きたいといったプロジェクトメンバーからの意見もあることから、次年度以降実施に向けた計画をしていきたいと考えている。



▶ しゅなまーち&犬フェス



▶ 紙芝居で迷子札やマイクロチップを説明

札幌ボランティアプロジェクト

札 幌

達成目標 冬季の除雪活動を中心に地域に貢献する

学びのテーマ 地域の需要を知り、地域に根差した活動をする

リーダー 山崎 成 生物学部生物学科 3年
 サプリダー 吉田 通 国際文化学部デザイン文化学科 2年
 アドバイザー 植田 俊 国際文化学部地域創造学科
 コーディネーター 田川正毅 国際文化学部デザイン文化学科
 番場 浩 ウチムラカンソウカレッジ札幌オフィス
 鈴木啓司 ウチムラカンソウカレッジ札幌オフィス
 (参加人数 6名)

活動概要

例年は冬季の高齢者宅の除雪を中心に、地域イベントの参加、ラベンダーまつりの運営、地域の町内会の方々のお手伝いを主に行っている。コロナ禍後は札幌キャンパスの学生会とコラボ企画、公共物の除雪を実施した。そのほか、現在札幌キャンパス内の学内掲示物のリニューアルプロジェクトが進行中。今後は地域の公共サインの修復や地域住民を対象とした自然環境学習の一環としてフィールドワーク、地元南区の動植物のリーフレット作成を企画している。

プロジェクトとしてコロナ禍にどのように向き合って活動したか

今年度は当初予定していた夏の環境教育や地域の祭りへの参加、ラベンダー祭りの運営などがコロナの影響で実施不可となり、新しい活動の考案が迫られた。そこでまず考えられたのが、コロナ禍で金銭的余裕のない学生を対象としたギフトカード配布である。このギフトカードは学生食堂・購買で1000円分の買い物利用券として使用することができるものである。ギフトカードの資金については札幌キャンパス学生会や同窓会に援助をお願いした。学生会・同窓会とコラボで実施したこの企画はギフトカードを受け取った学生はもちろん、コロナ禍で売り上げが減った食堂からも大変評判がよく、当プロジェクトにおける本年度の活動の「自ら考える力」の一步となった。しかし、宣伝方法やリモートで学校に来れない学生に対してのサポートが難しいといった点での課題が残った。

また、コロナ禍で昨年度実施できなかった「高齢者宅での除雪」に代わる「地域の公共物除雪」を企画・実施した。昨年度除雪が実施が出来なかった理由は高齢者への感染リスクの懸念があったためであったが、消火栓をはじめとした野外の公共物の除雪であれば感染面では特に問題がないと判断し実施した。初めての試みで消火栓の場所の把握や除雪の順番に戸惑いがあったが、町内会の協力もあり、無事完了することができた。また活動中に雪にはまって動けなくなった車を発見しその救助にも向かった。この活動についても「自ら考える力」や「挑み力」、「成し遂げ力」、さらには現状で起きている災害級の大雪に向き合うという点では「地域の需要を知る」という当プロジェクトのテーマを意識できたと考える。

課題としては公共物以外にも除雪をした方がよい歩道が確認され、実際に現地を歩いてみると分からないことも多くあった。今後の活動としては、これらの反省を来年度の活動に生かすほか、新たな活動としてデザイン文化学科の強みを生かした学内掲示物のリニューアルプロジェクトや公共サインの修復、生物学科の強みを生かした自然系のフィールドワークおよび南区の動植物のリーフレット作成を計画している。

今年度の活動ではコロナにおける制約があり、新規メンバーの勧誘ができず「集い力」がうまく達成できなかった。そこで、来年度は新入生歓迎会を開くなどしてメンバー勧誘の機会を増やしていきたい。また、現1年次生や2年次生の中にはクラブ活動に入り損ねた学生も多いと考えるので、新入生以外にも積極的なアプローチをしていきたい。



▶ 除雪作業の様子



▶ 藻岩夏祭り



▶ 定山溪アウトドアフェスティバル

ユニークプロジェクト／メディア掲載／センター長受賞者

2021年度ユニークプロジェクト一覧

校舎	プロジェクト名称	概 要
湘 南	Connect	現在はコロナにより活動が厳しい状況ですが、収束したら活動を再開する予定です。活動の目的は、秦野市・平塚市を舞台に子どもやその親、および地域の人々に対し、無料または安価で栄養のある食事や温かな団らんを提供するための日本の社会活動である「子ども食堂」を運営することで、子供たちの成長を支え見守り、最終的に大学生が地域や人と繋がることで、自分らしい生き方を見つけることを目指しています。
高 輪	NSテクノロジーズ	世間では凄まじい勢いでコンピュータが発展しています。その中でそれらを追従できる技術を磨く必要があります。そして我々はその技術を学ぶため日々前進できるように努力します。例えばEITソフトウェアデザインロボコンに出場し、ロボット制御を学びます。またロボット制御ではハードウェア設計の基礎的な仕組みについて簡易的に、またソフトウェア設計について学びます。このようなシステムの原理についての学習を深めます。
清 水	ワンダフル・マリニアマルズ	ゴミを再利用した生物ロボットを使い、環境問題と生物の面白さを多くの人に伝え、興味を持ってもらい考えるきっかけを作る。昨年度までの活動を発展させ、新しいロボットの作製とテーマをきめた解説に挑戦し、よりわかりやすく、より多くの人に伝えることを目指す。
	商品開発プロジェクト	静岡の名産物、特産品を使用し、学生独自の新しい商品を開発する。そして開発した商品で静岡県を豊かにし、活性化に貢献することを目指す。その過程の中で、私たち学生は開発することの魅力や苦悩を感じ、人と協力するための組織づくりを学び、且つ地域の方と触れ合うことによって社会人としての基礎力を身に付ける。また開発した商品を「長く愛される商品」へと日々磨いていく。
	Shark Amazing Project	解剖や骨格標本の作製を通じて各種のサメに関する生物学的な知識を身に着ける。また、サメ肉の試食やサメ革クラフトで資源としてのサメの利用方法を模索するほか、文化的側面に関する教養を深める。これらを通じて得た知識や情報をまとめ、学祭や沼津市戸田の深海魚まつり等でパネルの展示や解説を行い、一般の方に発信、サメへの関心を深めてもらう。
熊 本	商品開発プロジェクト	本年度は、昨年度と引き続き、釣りが及ぼす環境負荷をダイビングで行える海中清掃を活かし、サポートしていく。それと同時に得られる学びに重点を置く事を活動概要とする。その他に、昨年度のコロナ禍による活動自粛によって海中環境がどう変化していったのかを分析し課題点を見出していく。これらによって得られた成果は富士アカデミック、三保水中生物研究会にて発表し、地域住民や他大学の学生と意見交換しようとする。

2021年度メディア掲載一覧

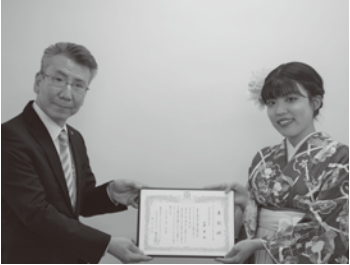
校舎	プロジェクト名	掲載・放映日	メディア名	分類
湘 南	病院ボランティアプロジェクト	9月21日	毎日新聞(神奈川版)	新聞
	キャンパスストリートプロジェクト	7月2日	タウンニュース秦野版	WEB
	ライトパワープロジェクト	8月9日	秋田魁新報	新聞
		8月11日	秋田魁新報	新聞
		12月20日	交通毎日新聞	新聞
	3.11生活復興支援プロジェクト	4月23日	神奈川新聞	新聞
		4月29日	カナコロ	WEB
清 水	商品開発プロジェクト	4月29日	47NEWS	WEB
		7月23日	静岡新聞	新聞
		7月30日	日刊工業新聞	新聞
		9月29日	伊豆新聞	新聞
		9月29日	テレビ静岡	TV
		9月29日	静岡第一テレビ	TV
		10月1日	静岡新聞	新聞
		10月4日	日刊工業新聞	新聞
熊 本	阿蘇援農コミュニティプロジェクト	11月12日	熊本日日新聞	新聞
	阿蘇は箱舟プロジェクト	8月9日	熊本日日新聞	新聞・WEB
		8月9日	西部読売新聞	新聞

校舎	プロジェクト名称	概 要
熊 本	阿蘇復興への道	先輩からきいた、熊本地震が発生する前の、阿蘇キャンパスの生活や、発災当時の学生の動き、下宿の大家さんとの関係、地域の人との交流を学内外とはず伝えていく。また、一般の方にも来てもらい、防災意識を高めてもらうことで、今後の起こりうる災害の被害を減少させ減災につなげる。南阿蘇に訪れ、魅力を発信することで南阿蘇の地域活性化、観光客の増す。また、実際に、災害が起きたところに行き、災害支援活動を行うことで、地域の復興に携わると共に、自らの防災意識もたかめる。
	動植物園プロジェクト	熊本市動植物園と連携を行い動植物と私たちの関係性および動植物を保護する心を育む環境教育を目的とし、解説版作成やイベントボランティアなどの活動を通して環境教育の基盤を強化するとともに、野生動物の生態や環境保全について学ぶ。
	熊本地域プロデュースプロジェクト	我々熊本地域プロデュースプロジェクトは熊本の「地域の魅力の再発見、再発信」を活動理念に活動している。この活動理念を設定したのは、地域の過疎化高齢化問題を観光により解決することはできないかと考えたからである。この活動理念を達成するために我々は、地域で住民の方と主にイベントの開催を行っている。現在、阿蘇エリア、天草エリア、大学周辺を中心に活動している。
	阿蘇環境プロジェクト	阿蘇地域について、生態系と水循環の両面から環境調査を行い、熊本地震後の環境変化とその後の回復過程を記録に残すとともに、阿蘇地域の雄大な環然を広く発信することで阿蘇地域の復興を支援することを本プロジェクトの目的とする。そのために、植生調査、水質調査を行い、その結果を発信するWebページの作成を行う。また、ドローンをを用いた植生調査も合わせて行う。
札 幌	地域連携プロジェクト	昨年度までには、主に「札幌市南区以外の多くの人にも良さや魅力を発信していく」という目標を掲げて活動してきたが、更に発展させより多くの方々に南区に行きたくなる魅力を南区の方々と一緒に創造すると共に、これまで鍛え上げてきたデザイン・地域連携の手法に磨きをかけ、更なる成果をあげる。

2021年度チャレンジセンター長賞受賞者

No.	校舎	プロジェクト名	氏 名
1	湘 南	病院ボランティアプロジェクト	高橋悠河
2		キャンパスストリートプロジェクト	川東綾香
3		Tokai International Communication Club	渡辺悠太
4		Tokai Dream Space Team	竹澤 董
5		3.11生活復興支援プロジェクト	越光 蓮
6		スポーツ社会貢献プロジェクト	中田伶哉
7		ライトパワープロジェクト	遠藤龍作
8		Beijo Me Liga	保田和真
9	熊 本	先端技術コミュニティACOT	和泉田刀麻
10		阿蘇は箱舟プロジェクト	中内拓海
11			永野智大
12	札 幌	あにまるれすぎゅープロジェクト	田中 碧
13		札幌ボランティアプロジェクト	黒野春華

＊認定条件
 1.チャレンジプロジェクトに加入して2年以上活動した者（継続していなくても構わない）
 2.プロジェクトリーダーを務めた経験がある者
 3.修了認定を2回以上受けている者
 4.卒業が決定している者



1年間の活動記録

月	プロジェクト名称	企 画	概 要
4月	病院ボランティアプロジェクト	病ボラだより	健康、病気、運動の知識をTwitterで広めた。
	Tokai International Communication Club	にこティー教室(～8月)	地域の外国にルーツのある児童生徒を対象に、週に2回の学習支援を行った。
	3.11生活復興支援プロジェクト	「東日本大震災から10年 未来へ思いを紡ぐ大学生プロジェクト」(～2月)	東北福祉大学、神戸学院大学、工学院大学が主催し、全11大学から80名近くの学生が、主に学生の視点を生かした防災・減災について話し合い次世代に繋げることを目的とした企画である。
	Beijo Me Liga	マスク作り	関わりのある学校と交流しマスクデザインをした。
	Tokai Dream Space Team	「Intelligent Water Rocket Copetition (IWRC)2021」の企画(～10月)	上級生と新入生で話し合いをしながら、開催形式、日程、レギュレーション等、大会の詳細を決めた。また、企業様への協賛、協力、後援依頼をした。
5月	先端技術コミュニティACOT	ドローン訓練	一年を通してドローン訓練を行い操縦技術の向上、新規操縦車の育成を行った。
	Tokai International Communication Club	春学期 別科日本語研修課程の留学生とのオンライン交流会(～7月)	週に1度、別科日本語研修課程の学生とクイズゲームや会話を通して交流した。
	Beijo Me Liga	UHWO and TICC Communication 2021(～7月)	月に1度、オンラインツール(Zoom)を使い、ゲームや会話を通して交流を行った。
	先端技術コミュニティACOT	ひまわり学園キャンプ	普段家にいる子供たちのために自炊やレクリエーションを行った。
	阿蘇は箱舟プロジェクト	TS学園交流企画	子供たちとZoomで交流することで信頼関係が増した。
6月	スポーツ社会貢献プロジェクト	サイバー防犯ボランティア	コロナ情勢下でのサイバー防犯の在り方について熊本県警・他大学と連絡を行い、ACOT内でSNSを用いた悪質な投稿などの通報を行った。
	Tokai Formula Club	除草作業	オオルリジミの生息環境の除草活動を行った。
	あにまるれすきゅープロジェクト	ニコニコ教室「親子遊び」	オンラインで大学と西部福祉会館をつなぎ、模様を探したり、動物のジェスチャーを交えたり、身体を動かしたりして、親子で楽しめるイベントを実施した。
	スチューデントアチーブメントセンター	スポンサーWEBミーティング	スポンサーウェブミーティングに参加し各企業様とコミュニケーションを行った。
	病院ボランティアプロジェクト	動物愛護ポスターの応募	環境省が募集していた動物愛護週間啓発ポスターを作成し応募した。
7月	スポーツ社会貢献プロジェクト	Challenge Week	本学在学を対象に湘南・高輪・熊本・札幌キャンパスで活動する18プロジェクトがMicrosoft TeamsまたはZoomを使用し、4日間の新入生ガイダンスを実施した。
	Tokai Formula Club	プロジェクト交流会	キャンパスストリートプロジェクト(CAP)の方々双方のプロジェクトの理解や質の向上、人とのつながりを目的とした交流会を実施した。
	ライトパワープロジェクト	1か月チャレンジ	スポーツや健康に関する疑問について1か月間検証を行い、SNS等で広報する企画を実施した。
	先端技術コミュニティACOT	スターフェスティバル2021	東海大学前駅にてセタの季節を演出するイベントを開催した。
	阿蘇援農コミュニティプロジェクト	車両製作(～9月)	2021年大会出場予定であった車両の製作を行った。
8月	あにまるれすきゅープロジェクト	車両製作(～9月)	8月開催のWGCに向けたソーラーカーの秋田試走を行った。
	サイエンスコミュニケーター	ドローン空撮	自由ヶ丘幼稚園からの依頼で幼稚園の校舎、人文字の撮影等を行った。
	キャンパスストリートプロジェクト	援農活動	菊池市で今年度初の援農活動を行った。
	ライトパワープロジェクト	譲渡会	きずなの丘で開催された譲渡会に参加した。
	Beijo Me Liga	先生は東海大学生！ おうちdeトライ☆サイエンスTube	平塚市中央公民館YouTubeチャンネルにて、「光」をテーマとした実験ショー動画を撮影・編集し限定公開した。
9月	Tokai Dream Space Team	サイエンスリンク・オンライン2021 ～つなげよう、ひろげよう科学の輪～	NPO法人サイエンスリンクのYouTubeチャンネルにて実験動画を配信した。
	先端技術コミュニティACOT	地域に根差した持続可能な開発のための教育(ESD)アジア太平洋交流プログラム	全国の高校生・大学生13団体が参加し、当団体は「水」をテーマとした実験を撮影・編集し配信した。
	阿蘇援農コミュニティプロジェクト	World Green Challenge (WGC)	本企画に参加し、若者による地域開発の取り組みの一例として、本プロジェクトの過去の活動を紹介した。
	病院ボランティアプロジェクト	TS学園スポーツ大会	ソーラーカーの国内大会である「World Green Challenge」に参戦した。
	キャンパスストリートプロジェクト	マルチャカルチャーキャンプ	ソーラーカーチャレンジ：グラントチャンピオン、チャレンジャークラス：優勝 グリーンラリー：優勝、タイムチャレンジ：3位
10月	ライトパワープロジェクト	新入生向け教育 (ペットボトルロケット打上)	子供たちと運動することによって、言葉の壁を感じさせない取り組みを行った。
	Beijo Me Liga	PC組み立て教室	外国と日本の文化の違いをお互いに尊重し合い、自国の文化について考えるきっかけ作りと外国にルーツを持つ子供たちのコミュニティ拡大を目的にして取り組んだ。
	Tokai International Communication Club	援農活動	5月初旬～6月下旬にかけて、新入生がオンライン開発をしたペットボトルロケットを打ち上げた。
	先端技術コミュニティACOT	新型コロナウイルスの感染拡大に伴い、8月実施となった。	本年度は動画配信という形で8月に撮影を行い、9月・10月に編集を行い、11月にYouTubeにて配信を行った。
	阿蘇援農コミュニティプロジェクト	南阿蘇で援農活動を行った。	南阿蘇で援農活動を行った。
11月	病院ボランティアプロジェクト	デザインエコバック企画	コロナ禍において花粉症の人が気を使われない、誤解されないようにすることが目的である。
	ライトパワープロジェクト	第1回組立試験	コロナ禍において花粉症の人が気を使われない、誤解されないようにすることが目的である。
	Tokai International Communication Club	第2回組立試験	機体運用技術の習得を目的とし、所有するエポルタ機の組立を行った。
	Beijo Me Liga	にこティー教室(～2月)	鳥人間コンテストへ向けた課題発見と対策を目的とし、所有するエポルタ機の組み立てを行った。
	Tokai Dream Space Team	ひまわり学園キャンプ	子供たちと日本の遊びを行い、日本について知ってもらう。
12月	先端技術コミュニティACOT	MOA美術館 港区児童作品展	港区児童作品展の選考会の運営補助として、審査員が選考しやすいように作品の並び替えや受賞作品の額入れ等を行った。
	阿蘇援農コミュニティプロジェクト	TKPといっしょ・3Dメガネを作る	3Dメガネ作製キットを準備し、当日は子どもたちに3Dメガネを作り、描いた絵を3Dメガネを使って立体視してもらった企画。ライブ中継形式で3Dメガネの作り方、絵の描き方、解説等を行った。
	病院ボランティアプロジェクト	動物愛護週間SNS投稿	動物愛護週間の間にSNSにて動物愛護関連の情報の毎日投稿を行った。
	キャンパスストリートプロジェクト	「コロナ禍で頑張る学生応援企画」 学生へのギフトカード配布	学生食堂・購買で使用可能なギフトカードを学生を対象に配布した。
	ライトパワープロジェクト	遊びの広場(子どもの家3か所)	子どもが家全体を使ってオセロゲームをしたり、音楽に合わせて新聞を破いたりなど、子どもたちが楽しめるレクリエーションイベントを行った。
2022年 1月	病院ボランティアプロジェクト	TOKAI HALLOWEEN TOWN 2021	東海大学前駅周辺にてハロウィンの季節を演出するイベントを開催した。
	キャンパスストリートプロジェクト	BRIDGESTONE World Solar Challenge Telemetry Challenge に向けた走行	大湯村ソーラースポーツラインにて、今年開催予定だった「BRIDGESTONE World Solar Challenge 2021」の代替イベントとして企画されたバーチャルプログラムである「Telemetry Challenge」に提出する走行データを取得するための実走行を行った。
	Beijo Me Liga	第1回CFRP破壊試験	製作する機体の安全性を高めるべく2020年度に破断した機体の骨組みの強度を確認することを目的とした試験を行ったが、メンバーの安全確保が難しいと判断し中断した。
	Tokai International Communnication Club	秋学期 別科日本語研修課程の留学生との交流会(～1月)	週に1度、別科日本語研修課程の学生とクイズゲームや会話を通して交流した。
	先端技術コミュニティACOT	TS学園キャンプ	東京観光をすることで日本について知ってもらう。
2022年 2月	病院ボランティアプロジェクト	「Intelligent Water Rocket Competition 2021 (IWRC)」競技説明会(1日目)	IWRC2021の競技説明会はオンラインで実施した。参加した全12チームに参加してもらい、イベントの趣旨や審査基準、今後の流れを中心に説明した。
	キャンパスストリートプロジェクト	「Intelligent Water Rocket Competition 2021 (IWRC)」安全信頼性講習会(2日目)	IWRC2021の安全信頼性講習会はオンラインで実施した。チームで開発するにあたり、必要な「コミュニケーションスキル強化」について講師の方に講演していただいた。
	Beijo Me Liga	「Intelligent Water Rocket Competition 2021 (IWRC)」安全信頼性講習会(2日目)	IWRC2021の安全信頼性講習会はオンラインで実施した。チームで開発するにあたり、必要な「コミュニケーションスキル強化」について講師の方に講演していただいた。
	Tokai Dream Space Team	「Intelligent Water Rocket Competition 2021 (IWRC)」安全信頼性講習会(2日目)	IWRC2021の安全信頼性講習会はオンラインで実施した。チームで開発するにあたり、必要な「コミュニケーションスキル強化」について講師の方に講演していただいた。
	病院ボランティアプロジェクト	「Intelligent Water Rocket Competition 2021 (IWRC)」安全信頼性講習会(2日目)	IWRC2021の安全信頼性講習会はオンラインで実施した。チームで開発するにあたり、必要な「コミュニケーションスキル強化」について講師の方に講演していただいた。
2022年 3月	病院ボランティアプロジェクト	「Intelligent Water Rocket Competition 2021 (IWRC)」安全信頼性講習会(2日目)	IWRC2021の安全信頼性講習会はオンラインで実施した。チームで開発するにあたり、必要な「コミュニケーションスキル強化」について講師の方に講演していただいた。
	キャンパスストリートプロジェクト	「Intelligent Water Rocket Competition 2021 (IWRC)」安全信頼性講習会(2日目)	IWRC2021の安全信頼性講習会はオンラインで実施した。チームで開発するにあたり、必要な「コミュニケーションスキル強化」について講師の方に講演していただいた。
	Beijo Me Liga	「Intelligent Water Rocket Competition 2021 (IWRC)」安全信頼性講習会(2日目)	IWRC2021の安全信頼性講習会はオンラインで実施した。チームで開発するにあたり、必要な「コミュニケーションスキル強化」について講師の方に講演していただいた。
	Tokai Dream Space Team	「Intelligent Water Rocket Competition 2021 (IWRC)」安全信頼性講習会(2日目)	IWRC2021の安全信頼性講習会はオンラインで実施した。チームで開発するにあたり、必要な「コミュニケーションスキル強化」について講師の方に講演していただいた。
	病院ボランティアプロジェクト	「Intelligent Water Rocket Competition 2021 (IWRC)」安全信頼性講習会(2日目)	IWRC2021の安全信頼性講習会はオンラインで実施した。チームで開発するにあたり、必要な「コミュニケーションスキル強化」について講師の方に講演していただいた。

月	プロジェクト名称	企 画	概 要
10月	あにまるれすきゅープロジェクト	シュナマーチ&犬フェス	動物愛護イベントであるシュナマーチ&犬フェスに参加した。
	病院ボランティアプロジェクト	譲渡会	九州最大級の譲渡会に参加した。
	スポーツ社会貢献プロジェクト	南沢旭台町内会との「ラベンダー花壇の冬囲い作業」	地域の町内会の管理する花壇の整備をお手伝いした。
	ライトパワープロジェクト	第1回ものづくり教室	創造力を膨らまし飛行機に関心を持ってもらうこと、ものづくりの楽しさを知ってもらうことをコンセプトに、秦野市立大根小学校・鶴巻小学校・広畑小学校・平塚市立みずほ小学校・金目小学校の小学1～3年生を対象に紙飛行機の製作と遊戯を行う教室を開催した。
	学生ロケットプロジェクト	第2回CFRP破壊試験	中断した第1回の同試験の再試験を行い、骨組みの強度不足を確認した。
11月	Beijo Me Liga	タイヤテスト	大湯村ソーラースポーツラインにてソーラーカー専用タイヤの性能テストを確認するためのテスト走行を行った。
	Tokai Dream Space Team	大樹町ポスター製作	大樹町打ち上げ実験に向けたポスターを高輪イラストサークルに依頼した。
	Takanawa共育プロジェクト	健マネ野菜zoom	TS学園の人に野菜について知ってもらう。
	先端技術コミュニティACOT	「Intelligent Water Rocket Competition 2021 (IWRC)」試験打上(3日目)	IWRC2021の試験打上は対面で実施した。競技大会前にロケットを打ち上げるリハーサル的なイベントであり、参加を希望した4チームが参加した。
	阿蘇援農コミュニティプロジェクト	高輪地区からレインボーブリッジを渡り、お台場で徒歩で散歩するイベント。港区の親子が対象で、TKPは当日の運営補助として引率、誘導等を行った。	高輪地区からレインボーブリッジを渡り、お台場で徒歩で散歩するイベント。港区の親子が対象で、TKPは当日の運営補助として引率、誘導等を行った。
12月	阿蘇は箱舟プロジェクト	ままとこテラス訪問	児童発達支援スクールままとこテラスさんからの依頼を受け、子供たちにロボットについての説明を行い、実際にロボットに触れてもらった。
	キャンパスストリートプロジェクト	南阿蘇農家さんツアー	南阿蘇の農家さんを回るツアーを開催した。
	ライトパワープロジェクト	飼料づくり	越冬のための飼料づくりを行った。
	病院ボランティアプロジェクト	星の観望会	阿蘇地域にて天体観望会を実施した。
	キャンパスストリートプロジェクト	学内掲示物リニューアルプロジェクト	札幌キャンパス内の古くなった看板などを新しくデザインした。
2022年 1月	スポーツ社会貢献プロジェクト	多世代交流会	クリスマスツリーの作成やパラバルーンを楽しむとともに、世代間の交流を目指して実施した。
	キャンパスストリートプロジェクト	スボ社運動会	来年度のプロジェクト活動に向けた1、2年生のイベント開催練習を行い、リレーやサッカーのルールを工夫して行った。
	キャンパスストリートプロジェクト	科学実験教室	秦野市立大根公民館において「空気の実験」と「水の実験」をテーマとした実験ショーを実施した。
	キャンパスストリートプロジェクト	子ども大学ひつかり奏アカデミー	東海大学湘南キャンパス19号館において、午前と午後の2部に分けて開催し、当団体アドバイザー岡田工教授とともに実験ショーを行った。当団体は「空気の実験」と「色の実験」の2つをテーマに実験ショーを行った。
	キャンパスストリートプロジェクト	クリスマスU-night2021	東海大学前駅駅前広場にてクリスマスの季節を演出するイベントを開催した。
2022年 2月	キャンパスストリートプロジェクト	大阪工業大学作業場見学	作業環境の改善とチーム間交流を目的とし、大阪工業大学人力飛行機プロジェクト様の作業場を見学した。
	キャンパスストリートプロジェクト	天文冬の陣	東海・慶応・東京理科大学など全14大学15団体と宇宙分野に関する共有会を行った。
	キャンパスストリートプロジェクト	「クリスマスU-night 2021」協力	キャンパスストリートプロジェクト主催で東海大学駅前を明るく装飾し、周辺地域住民や学生にクリスマスの雰囲気を楽しんでもらうことを目的にした企画である。本プロジェクトは、ツリーの装飾と設置作業に協力した。
	キャンパスストリートプロジェクト	オプンクリスマスリース	季節の物作りをし、お互いに発表し合った。
	キャンパスストリートプロジェクト	「Intelligent Water Rocket Competition 2021 (IWRC)」競技大会(4日目)	IWRC2021の試験打上は対面で実施した。棄権しなかった10チームすべての打ち上げが無事に完了した。
2022年 3月	キャンパスストリートプロジェクト	クリスマスイルミネーション	屋外にイルミネーションを設置した。また点灯式を実施し、その様子をTakanawa共育プロジェクト公式YouTubeにてライブ配信した。
	キャンパスストリートプロジェクト	熊本校舎イルミネーションライトアップ	地域の方々、東海大の学生や職員の方々に楽しんでいただくため熊本校舎をイルミネーションでライトアップした。
	キャンパスストリートプロジェクト	合鴨解体	合鴨農法の農家さんのもとで、合鴨解体をした。
	キャンパスストリートプロジェクト	コーヒー販売マルシェの手伝い	グランピングの「STAY HAPPY」にて、マルシェの企画運営を手伝った。
	キャンパスストリートプロジェクト	東海坂の清掃	東海坂の清掃を阿蘇復興への道のメンバーや黒川地区の方々で行った。
2022年 4月	キャンパスストリートプロジェクト	産山村農家さんツアー	産山村の農家さんツアーを行った。
	キャンパスストリートプロジェクト	犬フェス	動物愛護イベントである犬フェスに参加した。
	キャンパスストリートプロジェクト	譲渡会	クリスマス譲渡会に参加した。
	キャンパスストリートプロジェクト	プロジェクト間交流会	病院ボランティアプロジェクト、3.11生活復興支援プロジェクト、Sunflower、本プロジェクトのメンバーで、プロジェクト活動についての話し合いなどにより交流を行った。
	キャンパスストリートプロジェクト	「第44回鳥人間コンテスト2022」出場希望者説明会	「第44回鳥人間コンテスト2022」出場に向け説明会に参加した。
2022年 5月	キャンパスストリートプロジェクト	第2回ものづくり教室	創造力を膨らまし飛行機に関心を持ってもらうこと、ものづくりの楽しさを知ってもらうことをコンセプトに、海老名市立大谷小学校・海老名小学校・厚木市立厚木小学校の小学1～3年生を対象に紙飛行機の製作と遊戯を行う教室を開催した。
	キャンパスストリートプロジェクト	プロジェクト間交流会	コロナ禍の活動自粛によってプロジェクト同士の繋がりが薄れ、交流の機会が減少してしまったことから、キャンパスストリートプロジェクト、病院ボランティアプロジェクト、Sunflowerとの交流会をZoomを利用し開催した。
	キャンパスストリートプロジェクト	譲渡会	新年最初の譲渡会に参加した。
	キャンパスストリートプロジェクト	キャンパス周辺公共物の除雪	札幌市南区南沢地区の消火栓の除雪を行った。また横断歩道付近の除雪や雪にはまった車の救助も行った。
	キャンパスストリートプロジェクト	最終報告会	2020年度のプロジェクト活動について、各プロジェクトが5分程度の活動報告動画を制作し、お互いのプロジェクト活動についてオンラインにて報告し合い、動画は教職員で構成される学内委員と各プロジェクトメンバーによる投票で審査された。また、活動報告動画は、大学公式YouTubeチャンネルでも公開された。
2022年 6月	キャンパスストリートプロジェクト	医療従事者の声を届けよう	コロナ禍における医療従事者の訴えを多くの人に発信することで医療従事者の本音を理解する事と誤解を無くす事を目的として実行した。
	キャンパスストリートプロジェクト	菜企画	病院の患者さんを楽しんでもらえることを目的に菜を制作・配布した。
	キャンパスストリートプロジェクト	車両製作	22年度大会出場する車両の製作を開始した。
	キャンパスストリートプロジェクト	煙づくり	自分たちの煙を片付け、耕しはじめた。
	キャンパスストリートプロジェクト	最終報告会表彰式	最終報告会での審査により決定した上位3プロジェクトに「グッドプロジェクト賞」が授与され、山田清志学長と受賞プロジェクトの代表者との対談も行った。表彰式の様子はライブ配信され、全プロジェクトの学生もオンライン形式で参加した。
2022年 7月	キャンパスストリートプロジェクト	絵本製作	日本における虫歯発症率の高さを幼少期の歯磨き習慣の未定着が原因だと仮説立て、幼少期の子どもに向けて、歯磨きの重要性を訴えかけるような内容の絵本70冊の作成を実行した。
	キャンパスストリートプロジェクト	電気自動車・燃料電池車・ソーラーカー製作講習会	電気自動車・燃料電池車・ソーラーカーの製作などに関する講習会を開催した。
	キャンパスストリートプロジェクト	物資支援	カンボジアへの物資の発送をした。
	キャンパスストリートプロジェクト	TKPといっしょ プラネタリウムを作る	プラネタリウム作製キットを準備し、当日は子どもたちがプラネタリウムを作り、星座への興味を持ってもらう企画。ライブ中継形式でプラネタリウムの作り方、絵の描き方、解説等を行った。
	キャンパスストリートプロジェクト	夜桜ECOライトアップ	被災時の電源確保のデモンストレーションとして、太陽光発電を利用して夜桜ライトアップを行った。学内にいる桜の木を、開花から葉桜になるまでライトアップした。